

# 小田原史談

第 190 号

発行所 小田原史談会  
小田原市栄町2-13-20  
アオキ画廊内TEL(24)0637

## 小田原史談会発足のころ

三津木 國輝

昭和三十年(一九五五)一月、市民  
待望であった郷土資料の展示施設として、小田原市郷土文化館  
が開館した。一階が自然科学室、  
二階が歴史考古学室であった。

自然科学室の展示は、小田原  
生物同好会が松浦茂寿会長(市  
文化財保護委員)の指導による全  
面的な協力によってなされた。  
歴史考古学室については、文化  
財保護委員の立木望隆氏、館長  
の社会教育課長・中野敬次郎氏  
が主体となって、各地域の郷土  
史研究者達の協力によってな  
された。

また小田原の生き字引といわ  
れて人望があつた滝口伊將氏が  
館主事であつたところもあつて  
か、自然・人文の研究者達が郷  
土文化館に集まり、情報交換の  
場として利用されていた。

そのころ郷土文化館に集まる  
人達は、市文化財保護委員の長  
谷川英麿、立木望隆、松浦茂寿、  
湯川治郎、加藤誠夫の各氏をは  
じめ、城所晋、東海俊美(山角  
町)南町・東海医院、中村雅治  
(北原白秋の友人)、難波明(十字  
町)南町・獣医、鞠川康英(幸町  
)本町・正恩寺)などの各氏で、来  
館の都度、歴史放談から話題は  
さらに広がって、郷土文化館に  
集まる人達で、館に協力する会  
を結成しようということになつ  
た。

会設立の呼びかけによって、

前記のほかにさらに井上英一  
(のち小田原史談会会長)、内田  
武雄(高田・郷土研究家)、落合  
信一(のち小田原史談会副会長)、  
川口潤一郎(郷土史研究家のち小  
田原史談会理事)、岸達志(久野・



前列 左から二人目大類博士・鈴木会長(市長)・藤岡博士・落合副会長・  
興水事務局長・内田武雄。  
中列 左から難波副会長・女・田辺教育委員長・原助役・中野敬次郎・神  
保圭介・東海俊美・大類正久。  
後列 左から三人目瀧口伊將・清水専吉郎・額田喜代春・川口潤一郎・三  
津木・杉崎正五・中野教広。

東泉院)、清水専吉郎(高梨町II本町・古清水旅館)、杉崎正五(田島史談会々長)、鈴木顛弘(国府津・法秀寺)、中野教広(井細田II扇町二・妙円寺)、橋本庄平(板橋・刀剣研究家)、蓑田長平(下府中史談会々長)、山田一郎(久野史談会々長)、などの各氏をはじめ多くの人々が馳せ参じ、昭和三十年七月二十八日、発起人会が開会され、直ちに発会することになった。

会の名称は『小田原史談会』とし、会長には飯泉山勝福寺山主峯堅雅大僧上が、副会長には難波明、落合信一の両氏が推され、顧問に小田原市長鈴木十郎氏が推された。ところが、市長に顧問の就任依頼に伺ったA氏は、鈴木市長の史談会への並々ならぬ熱意を知るに及んで、鈴木市長に会長を依頼してしまった。一方B氏ほかは峯大僧上に会長をお願いし承諾されていた。なんのことはない、会長が二人となつてしまった。

そこで協議の結果、峯大僧上には顧問をお願いすることとし、B氏ほかが事情を説明して了解を得ることができたが、峯大僧上の初代会長は幻のものとなつてしまった。

史談会が発足すると、各地域で支部が結成されて会員も増加し、史跡めぐりや講演会など活

発な事業が行われた。特に現在では実現することは非常に難しいと考えられる、市内寺院所蔵の「仏像・仏画展」が、小田原市寺院団との共催で、郷土文化館を会場として実施することが出来た。この展覧会には、秘仏を除く多くの仏像・仏画が出陳され、これによってその後、市の重要文化財に指定されたものがあった。

また昭和三十五年五月、市民待望の小田原城天守閣が復興されると、天守閣の設計者である

東京工業大学教授藤岡通夫博士と、城郭研究の権威者である東北大学名誉教授大類伸博士をお招きして、「小田原城完成記念講演会」を実施し、日本城郭史における小田原城の位置付けを市内外の人々に周知した。

このような活発な活動と共に、研究発表の場として、昭和三十六年三月には、機関紙『小田原史談』を発行し、現在一八九号が発行され、多くの論文が発表されている。(みつぎ・くにてる 郷土史研究家)

### 小田原歴史見聞館と悪い

写真は、小田原歴史見聞館の玄関です。これには、昭和四年に城内小学校の講堂として建てられたという前身がありました。そして、いくつかの特徴がいわれています。

- 一、和洋折衷の建物で、明治から大正にかけて、学校や役所などに多く作られました。
- 二、寺社建築の様式を採り入れた造作がみられます。
- 三、柱・横木・補強の組合せ等、耐震構造が施されています。
- 四、隣地の県立小田原高等学校(現県立小田原城内高等学校)の講堂も、城内小学校講堂と同

じ造作になっています。

城内小は昭和四年七月、小田原高女は昭和四年九月という落成です。

五、だれが設計し施行したのか、不明です。

むしろ、無名が当時の職人の誇りであったとする時代の雰囲気を負っていました。

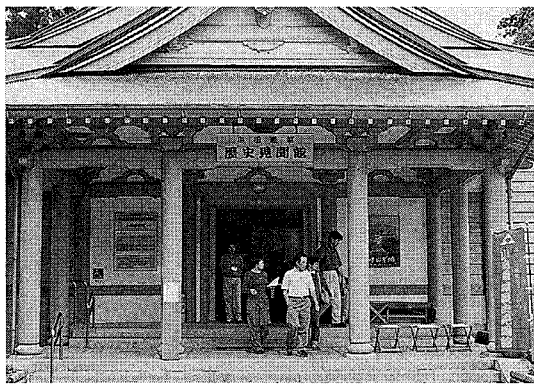
これらに対して、一つの思い(玄関の装い)を綴ります。

古い寺社建築の造り(入母屋屋根・かえる股など)を、玄関の装いに採り入れた設計者に、郷

土愛を感じます。城内という土地柄を大事にした傑作品、威厳と品格をもたらした建築物、和洋折衷の講堂であり、設計者の「城内に在る学校」への配慮を感じます。城内という地相に、古寺社建築の手法をもちこんで、城跡の都市景観をうまく調和させた見識に脱帽させられました。

小田原城跡の都市景観は、今の三の丸小学校、和風建築の外装に引きつがれました。

城内という地相を生かした文化遺産の講堂としてうけとめ、温かく見守りたいものです。(石綿 勉)



城内小学校講堂から変貌の歴史見聞館

# 小田原の気象 (その二)

芦川 駿

## 六、降水量

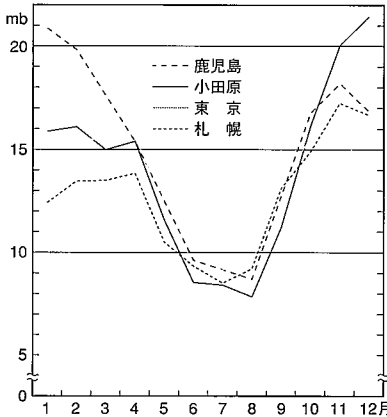
空から落ちて来る雨は勿論、雪、霰、雹、霧、等もすべて水になおして区別無く一まとめにして取扱「降水量」とした。単位はmm(ミリメートル)で計る。

なお、降水日時も頻度等関連事項も付記した。

## 七、気圧について

私達地球上に住む者は等しく空気の重さを担っている。この重さを「気圧」と言う。

## 各地の月別平均気圧 (海面較正)



## 6. 小田原の降水量及び降水日数

月	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計 (mm)
雨量	59.4	57.4	83.5	146.0	181.3	174.6	259.4	157.3	191.9	224.0	169.2	142.9	1,847.0
降水日数	5.6	5.8	7.2	10.2	11.9	11.2	13.6	11.4	7.3	12.0	10.0	7.5	114.7
同上概数	6	6	7	10	12	11	14	11	7	12	10	8	平均9日
季節	冬			春			夏			秋			
数日	19日			33日			32日			30日			114日

但し、1日8時間以上降水のあった日を降水日とした。

従来は水銀柱の高さで計っていたが現代では新しい単位の気圧計で計り、単位も国際単位のhpa(ヘクトパスカル)となった。なお、換算は1hpa(ヘクトパスカル)は1mb(ミリバール)である。

## 八、小田原の風

市内の南は太平洋、西は箱根の山々、北は丹沢山塊がそびえているので風は南の海の方から吹いて来る場合が多い。一般的には箱根山が近いので、西風が多いはずだが、市内を離れて酒匂川を越すと箱根から吹きおろす「山おろし」の西風が強くなる。

従って旧市街は海からの南風か或いは北の丹沢山脈からの北風が多く東や西の風は少ない。たゞ、南から上陸する台風は高波と共にしばしば上陸し、被害を出すので予想がつかず、嵐や大風による予想外の被害も出る場合が多い。

## 九、小田原の天気

当地は、海の幸、山の幸にも恵まれ、その上箱根・湯河原の温泉地にも近く、昔から史跡・旧跡にも富み、気候温和で風光明媚と共に海・山の産物にも恵まれて生活しやすい環境と、大都市の東京・横浜にも近くて文化的、交通的にも恵まれた土地

## 小田原の天気の割合

天気	記号	実数	%	百分率	割合	月の割合
快晴	○	45日	12.3	12	4	晴16
晴	①	145日	39.5	40	12	
曇	◎	124日	34.0	34	10	曇16
雨	●	51日	13.9	14	4	雨4
		365日	100.0	100	30	計30

である。

天候の状況はどうかと言うと、つぎの表のように平均すると月の半ばは晴天の青空に恵まれ、雨天は平均すると月に四、五日で、梅雨期を除けば晴れた日が続くのである。

## 十、生物気象

植物は決まった季節に花を咲かせ、実を結ぶ。動物も決まった季節に子を産み育てる種類が多い。人間として季節に応じた生活の営みをしている。

生物気象は、その本になる生物の生き方から季節を知り、季節を利用する試みである。

観点の一例を挙げると  
植物……開花や結実、落葉等

動物の月日からその年の遅速を判断する。  
動物……初見の日、初鳴の日等を記録し、その変化を見て季節の遅速を知り生物暦を考えらる。

植物の場合  
発芽の日 例えは芝、桑、いちぢょう 等の発芽の日を観察する。

開花の日 梅、椿、タンポポ、桜、山つつじ、ノダ藤、山萩、アジサイ、サルスベリ、す、き、水仙、山吹、白つめぐさ、さざんか等の観察。

満開日 染井吉野等  
紅葉 いろはかえで等  
黄葉 いちぢょう等  
落葉木 いちぢょう、いろはかえで、桑、等

動物初見日 燕、もん白蝶、黄あげは蝶、もん黄蝶、塩からトンボ、蚊、へび、とかげ、かな蛇、青大将、とかげ、秋あかね

初鳴日 ひばり 鶯 百舌 油蟬 ひぐらし等  
ニイニイ蝉 ミンミンツクツクボーシ  
フンコロガシ 等

数年を観察し、記録しておく

と、その地方での初見又は初鳴日が大体見当がついて来る。また、それによってその年の季節の遅速が分かるので、記録が大切である。

十一、特に温暖化の影響について

私達の住む小田原も、近年の温暖化の影響で冬の寒さも和らぎ、凌ぎ安くなつて来た。実は、この暖かさは「地球規模の温暖化」の一環で世界的に見ると問題である。

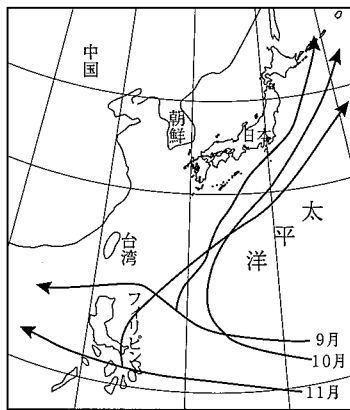
そこで、一九九〇年に「気候変動に関する政府間パネル」が開かれ「温暖化の対策を怠れば、二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)の排出量が更に増加して、地球全体の温度が十年間に0.3〜0.6度つ上昇して行くだろう」と警告している。更に、「このまま、推移すれば、地球の気温も次第に上昇して両極の水や高山の氷河やツンドラ地帯の凍土が溶け出し、湿地や湖沼が生じ海面の水位も上昇し、島嶼や低地、湿地が水没を始め、一方、砂漠地帯は拡大して乾燥も始まり裸地や荒地も増加を始め、人も住めなくなるだろう。そして、各地に「民族の大移動」が始まって大混乱を生ずる……」と

この温暖化対策は、世界会議に度々出てくるが、各国の国内

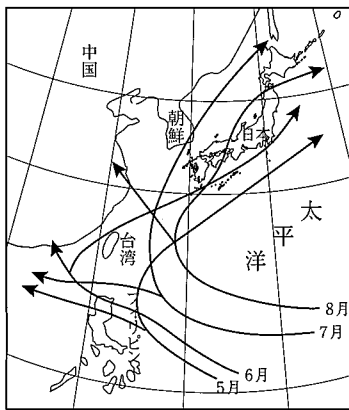
事情が異なるので仲々まとまらず、一九九七年十二月「世界気候変動枠組条約第三回締約国会議」が日本の京都で開かれ「温暖化防止」を中心に会議が持たれた。

会議は、温暖化の原拠である二酸化炭素ガス(CO<sub>2</sub>)の排出をどう調節するか、或いは、減少させるかで各国の利害が交錯し、仲々まとまらず、結局、日程を一日超過して、やっと各国の二

台風の月別経路図



9月~11月



5月~8月

酸化炭素ガスの削減率(%)がまとめられた。

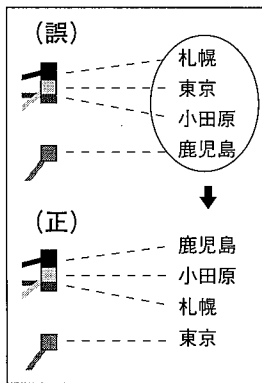
それによれば、二〇〇八年から十二年の五年間で「温室効果ガス(CO<sub>2</sub>)」の年間平均排出量を一〇九〇年のレベルにもどしヨーロッパ連合が8%、米国が7%、日本は6%、その他の国々も削減率を決めて、今後の努力を期待してやっと決まったのであった。

ところが、後になって分った事だが、米国は持ち帰って案を検討したが折角決った案を認めず否決してしまつたので、世界は今後どうなるのか不安に落ち入つたのである。

最後に、毎年日本の何処かを襲い被害の出る台風の進路図も付記しておいたので災害の一つとして考えておくべきだ。

お詫びと訂正

第一八八号掲載の「小田原の気象」(その一)の「月別平均温度」グラフに誤植がありましたので、ここにお詫びして訂正いたします。



## 5. 戦後の風水害の記録

D. C	年号	月日	記事
1947	昭和22年	9月13日～15日	カスリン台風が伊豆半島を北上し、小田原に205.1mmの大雨、死者1名、行方不明者1名、負傷5名、全壊家屋181戸、浸水家屋5,380戸、堤防決壊18ヶ所。
1948	〃 23年	9月15日～18日	アイオン台風、伊豆半島南端より上陸、千葉県銚子港付近から北海道東方沖に、市内早川、酒匂川に洪水、海岸に高潮、死者19名、行方不明者11名。負傷者3名。全壊家屋99戸。
1949	〃 24年	8月31日～9月1日	キテイ台風、鳥島より北上、関東西部雨量は山地で300mm以上、平野部で100mm山岳部で400mm塩害と船舶の被害多発、死者22名、行方不明者2名等、被害甚大。
1950	〃 25年	8月3日～8月6日	台風11号が房総半島より上陸。台風12号が駿河湾より上陸いずれも山梨県より新潟県に抜けた。丹沢で雨量300mm。小田原で165.1mm。床上浸水307戸、床下浸水272戸。堤防決壊11ヶ所の被害が出た。
1952	〃 27年	6月22日～24日	ダイナ台風浜名湖付近に上陸。本県北部を通過して千葉県へ。小田原の雨量161.9mm。死者4名。行方不明1名。負傷者8名。全壊家屋29戸。半壊3戸。農作物の被害大。
1953	〃 28年	7月18日～20日	前線停滞による水害。小田原雨量200mm。
1953	〃 28年	8月下旬～9月下旬	寒冷高気圧の停滞により低温続く。小田原27日19.3°。農作物減収。8月27日19.3°。
1954	〃 29年	9月11日～19日	台風12号、九州を横断、日本海へ。小田原の雨量157.7mm。この頃富士初冠雪(8月28日)。
1957	〃 32年	6月26日～28日	台風、梅雨前線を東進。小田原雨量137.5mm。死者3名、負傷者6名、全壊家屋16戸、半壊20戸、堤防決壊、崖崩等156ヶ所、農作物の被害甚大。
1958	〃 33年	3月28日～31日	大陸性高気圧の南下による降雪と低温。小田原22°前後。麦穀の被害総額17億円余。
1958	〃 33年	7月21日～29日	台風11号、静岡県御前崎付近より上陸強風を伴う。小田原雨量207.6mm。死者2名、負傷者35名、全壊家屋27戸、半壊38戸、被害大。
1958	〃 33年	9月25日～27日	狩野川台風、伊豆半島を横断、江の島付近に上陸、東京、鹿島灘に抜ける。雨量小田原137.5mm。死者93名、負傷者167名、堤防決壊、崖崩れ等821ヶ所。
1959	〃 34年	8月12日～14日	台風7号、硫黄島東方より上陸。新潟を通過して日本海に抜ける。雨量、小田原204.5mm。死者4名、不明者1、負傷者9名、農作物の被害大。
1959	〃 34年	8月18日	寒冷前線による竜巻、市内に発生 負傷者1、被害家屋9戸。

D. C	年号	月日	記事
1959	昭和34年	9月25日～27日	伊勢湾台風、紀伊半島から中部地方伊勢湾から日本海へ。東京雨量207.6mm、死者4名、負傷者11名、全壊家屋38戸、その他被害大。
1061	◇ 36年	6月24日～29日	前線停滞、雨量 平地で300mm以上、山地で500mm以上。小田原181.2mm。行方不明者1名、負傷者55名、山崩れ等被害大。
1964	◇ 40年	8月21日～22日	台風17号、伊豆半島より上陸、東京、鹿島灘に抜ける。雨量 箱根500mm以上、床上、床下浸水多数、崖崩れ30ヶ所。
1968	◇ 43年	2月15日～16日	大雪、低気圧の南岸通過による交通機関、農業に被害大。
1969	◇ 44年	3月4日	大雪、低気圧南岸接近による各地に大雪交通機関被害大。
1970	◇ 45年	6月～8月	関東洋上に冷水塊停滞、濃霧発生、船舶被害18件。
1972	◇ 47年	7月10日～12日	梅雨前線による大雨。丹沢山地51mm。小田原で192mm。海拔事故発生、死者6名、行方不明者3名、山崩れ299ヶ所。
1973	◇ 48年	11月中旬～翌1月中旬	無降雨、乾燥注意報発令11月17日～1月21日まで連続。
1974	◇ 49年	7月6日～8日	梅雨前線、台風8号による大雨、竜巻起る 小田原174mm、死者13名、負傷者21名、その他被害多数。
1975	◇ 50年	12月10日～翌2月4日	無降水が57日間続いた。
1977	◇ 52年	9月7日～10日	沖永良部台風、停滞前線が活動中台風が接近。奄美大島や沖永良部島を直撃した。
1979	◇ 54年	10月18日～19日	台風20号、沖縄から本州紀伊半島に上陸。北海道に抜けた。小田原188mm。箱根300mm。死者4名、負傷者119名であった。
1980	◇ 55年	7月1日～8月31日	長雨低温寡少、オホーツク海高気圧の居すわりによる平年比-1.5℃の野菜、果物の被害大。
1981	◇ 56年	10月22日～23日	台風24号、関東南沖通過。雨量 小田原166mm。
1982	◇ 57年	8月1日～2日	台風10号、高知県より本州に上陸。小田原168mm。死者7名、全壊10戸、半壊3戸、床上浸水142、床下300戸。
1983	◇ 58年	12月15日～翌3月31日	寒冷移流と低温大雪。降雪日12月3日・1月7日・2月10日・3月7日の計27日。
1985	◇ 60年	6月29日～7月1日	台風6号、静岡県より上陸。小田原201mm。死者1名、負傷者7名、半壊28戸、床下浸水241戸、崖崩れ89ヶ所。
1990	平成2年	9月30日～	低温高気圧、沖縄方面から紀伊半島に上陸。東海道に沿って北上。房総半島上で温帯低気圧に。小田原208mm、箱根202mm。
1991	◇ 3年	8月20日～21日	小笠原諸島から西島、奄美大島を通過して九州西岸に。朝鮮半島に上陸。県西に大雨。小田原で171mm、箱根399mm、死者1、床下浸水、崖崩れ等。
1991	◇ 3年	9月8日～20日	銚子南東から三陸沖に、雨量、小田原290mm、箱根305mm、死者2名、負傷者5名、床上537戸、床下1,523戸、崖崩れ272ヶ所。 以上

# 補遺 尾崎亮司 七 小田原城内高校と関わりある人物②

岡部 忠夫

- ・「小田原保勝会略記」碑に関連して
- ・小伊勢屋の身代を揃るがせた小田原競馬場建設 ①④
- ・(以上第一八四〜八八号)
- ・小田原城内高校に関わりある人物①
- ・(註) お濠埋立反対運動を改題
- ・(以上一八九号)
- ・小田原城内高校に関わりある人物②
- ・(以上本号)
- ・(次号以下に掲載予定)
- ・お小田原城内高校に関わりある人物③
- ・小田原城の変遷
- ・お濠埋立反対運動
- ・北村透谷碑について
- ・むすび

## 鈴木市長三選への論調

昭和三十二年(一九五七)二月、小田原市長選挙が行われるが、鈴木十郎市長の独走のまま三期目に突入する気配が濃い、と新聞は報じた。

新春とともに解散を考慮した中央政界の雲行きを反映して、小田原政界の動きも複雑であった。河野一郎派に属する鈴木市長は安定しているに對して、ひとあわ吹かせようとした小金義照派は、昨夏市議会議長選挙でミソをつけ、意気が舉がらなかった。革新系の社会党、共産党は市長候補者難であった。

『神奈川新聞』は小田原市と鈴木一族と題して二回にわたってキャンペーンをかけた。その見出しには「対抗馬ついに出不例のない無競争当選」、「あと四年が仕上げ善政生かすバックボーン」とある。「人口十万をこえる中都市で、市長選挙に

対抗馬の立候補がなく無競争となったということは、戦後新しい地方自治制度が確立され、首長の公選制を憲法が保障するようになつて全く例のないことである」との論調は、多選は弊害が多いということとされる。記者に「社会の木鐸」の意識があつたからだろう。小田原市長選に対抗馬なく無競争となった理由を『神奈川新聞』は、つぎのように記す。

「無気力の小金派の弱みは市政について独自の主義、政策をもっていない」小田原の社会党は市議選に単独候補を立てて保守・革新の一騎打ちをいどめるほどの実力はまだ備えていない」との観点から分析している。

## 市長、鈴木一派の表現嫌う

「世間では鈴木市長を中核とする政治勢力を、鈴木一家とか鈴木一族と呼んでいる。これは一つの政党ではもちろんないが政治的、経済的に小田原の地に深く、長く根を下ろし、これを無視しては小田原の今日も明日もないといわれる程の存在となつてい」と。

陰でいろいろ批判があつたことも事実である。漁港を県費で造らせ、一族の利益を図っている、という陰口がその最たるものであつた。その頃の事情を反映して『神奈川新聞』は、さらにつぎのように記している。

「〇〇一家」というとまるでヤクザの身内のような印象を与えるせいもあつてか、文化人の鈴木市長は自分達を指して「鈴木一家」とよばれることを神経質ほど嫌つて「そんなものはない」と否定する。つまりそれは自分の身内だけで徒党を組んで市政をろう断し、経済的な利益をたくらんでいるようなことは絶対にならない。そういう意味での鈴木一家なるものは存在しないという意味のようである。「鈴木市政はそんな暗いものはない。もっと明るく市民、とりわけ子供や婦人の中に脈々と生きている」というのが彼の自負である。そして自分たちをさして「鈴木一家」などと呼ぶのは自分の手に権力を握つて市政をろう断しようとする権力主義者のためにする呼び名に過ぎないときめつける。新聞までがそんな呼びかたを使うのは怪しからんといわんばかりのけんまくだ。

強気というか、剛毅というか鈴木市長の姿勢にたいして、『神奈川新聞』は、鈴木市長の基礎は鈴木一族の善政あるからだ、次のように巧みに説明する。

鈴木市長の個人的にすぐれた人格、識見、才能の持主であっても、そうやすやす三選が続けられるものでない。それは主として先代の善左衛門と、長兄の英雄の二名による徳望と努力が、積み重なって地盤を作り上げたものであるというわけである。

善左衛門は一切の公職につかなかつたが相海漁業の名で知られる小田原から足柄下郡の沿岸一帯の漁業権を手に入れ、また箱

根塔の沢に環翠楼を開いた。英雄は請われるままに代議士となったが、その徳望と識見によって鈴木家の基盤はますます磐石となった。

戦後の漁業改革も鈴木家の沿岸漁業権の支配力を骨抜きするには至らなかった。小田原信用金庫(現・さがみ信用金庫)がドツチ・ラインの煽りを取り付け騒ぎを起こしたとき、これを切り抜けたのは鈴木英雄の力量によるものだった。

いま鈴木家は、英雄を頂点に十郎市長と二六相海漁業組合長とを太い柱とし、一族ががっちりスクラムを組んでいる。経済的には小田原信用金庫、相海漁業組合、環翠楼などが骨組みとなつて、小田原市議会の半数をしめる与党勢力が十郎市長の三選を可能とするも三選が限度であると説く。

しかし、新聞の論評をよそに市長は三選はおろか五選まで続けた。

#### 鈴木市政に立ち向かった加藤一作

加藤一作は、小田原女子短期大学創設の功労者である。しかし、『小田原女子短期大学30年史』に彼の名は留められてはいない。ただ、その片鱗というか、それらしきものは残されている。

加藤一作(明治二十九年・一八九〇〇昭和五十年・一九七五)は、足柄上郡怒田村(現・南足柄市怒田)の出身で、今は静かに故郷の地に眠る。

ところで、彼の経歴を調べてみても漠として不明なことが多い。それは、鈴木市政に戦いを挑んで敗れ去っているのが主な理由であろう。それに彼には嫡子がなく、彼自身、身辺のことを語る相手がいなかった。

加藤家の墓守をしているのは、彼の養女とその子孫である。

彼には伝説がある。青物市場を開くのに当たつての資金は満州で稼いだという。それは何時頃であつたか? 勿論、敗戦後満州からの引揚げは着のみ着のままであるので該当しない。すると、わが国が羽振りの良かった戦前のことになるが、今となつては調べる方法が無い。

また、森格と乳兄弟であつたという伝説、これは彼が森格に較べ二十歳も年下であるので当てはまらない。なお、森格については出生の秘密があるが、関連がないので避ける。ともあれ、彼は森格のように中国大陸で活躍するような話を好んだのではないか、それにしても、彼に伝説がまつわりつくのも、事実を語る機会が少なかったからかもしれない。

#### 仲間つくりがうまかつた加藤一作

彼の活躍の舞台は、主に小田原であつたと思われるが、その活動の拠点を緑四丁目六〇九番地の茗花園に置いた。その時期については明確なところ分らない。茗花園はお茶・菓子・文房具などの小売店で、城山中学校校庭の東辺あたりの南側崖下の道を隔てたところにあつた。現在、茗花園は道路の拡張のため失われてない。

彼は仲間をつくるのがうまかつた。人と知り合うと十年の知己の如く振舞つた。怒りを顔にだすことなく、にこやかに応じその仕種には大人の風格があつた。

昭和二十四年四月、養女を小田原高女に

#### お詫びと訂正

一八八号(平成14年1月発行)7ページ二段一行目記載が誤つていますので、謹んで次の通り訂正致します。

大手牛乳会社販売店のオーナーである守屋喜代松氏の父君時松は、伊勢田の影響を受け、荻窪で酪農を営むようになったという。

通学させるようになると、PTAに仲間の輪を広げていった。

彼は、昭和二十六年(二空)四月三十日に行われる戦後二回目の小田原市議会議員選挙に自由党で出馬し、選挙事務所を茗花園に置いた。立候補者75名中、八百三十三票を得て第六位で上位の初当選を果たした。四年後の三十年の市議会議員選挙に今度は無所属で立ち、八百九十八票と票数は増えた。おそらく票集めには、前回同様彼が経営する青果市場関係者の応援があつたと思われる。しかしながら、当選順位は30位と前回より下だった。

前回に較べると、今回は23位までが千票以上を獲得したのはほとんど新人であつた。みな選挙巧者になつていったと思われる。それに、社共の革新政党を別として自由党を名乗つたのは三名(一名当選、前回は十一名中当選五名)、あとは全員無所属を名乗つた。

加藤一作にしてみれば、昭和三十年二月衆議院議員選挙で第三区から立候補の自由党選出の小金義照(足柄上郡)を落としていたので、この年の小田原市議会議員選挙で無所属で立候補したが、劣勢の自由党を建て直す気持ちは変わらなかったと思う。

(以上資料:小田原新聞社刊『小田原市制50年誌』)



## 女子短期大学創設に乗り出す加藤一作

「小田原に女子短期大学をつくらう」加藤一作の呼びかけには魅力があった。小田原城内高教員の中には、彼の主張に耳を傾ける者がいた。

そして、いつの間にか加藤一作の構想に係わる教員がでてきた。

城内高校に筆者が卒業した中学校の三期先輩が三名いた。うちA先輩とB先輩の二名が加藤一作の短大構想に加わっていた。私は、小田原に短大をつくるのは砂上樓閣のようなもので、夢のような話だと見ていた。

しかし、仕事は進められていた。

昭和三十一年の春先だったと思う。学生募集のピラが配られた。見ると、短大の教授陣に小田原城内高校の校長以下主だった教員の名が担当する教科目とともに載っているのではない。

加藤一作には、個々の教科目ほどの教員がよいか分からない。知っているのは、彼の構想に気持ち寄せた教員で、A、B先輩の二人である。

※

学期末の納会のとぎだったと思う。A先輩は、どじょう掬いの隠し芸を披露した。このような芸を、機会あれば演じてみたいと思うのだが、不器用で無芸の私にとって出来る訳はない。まことに天下一品といつてよいくらいの芸だった。同時にA先輩が苦労を重ねた結果ではないかと感じた。

A先輩は、開け広げな人柄と人懐っこい笑顔をする。先輩は社会学の担任で、授業で臨場感に溢れた状況を話して生徒に人気

があったようだ。あるとき、先輩は職員室に戻ると「パリ市民は距離にして数mばかりにあるバスターイーユ監獄に迫った。この教室のうしろあたりのところだった」と授業でのフランス革命の発端となったといわれるパリ市民のバスターイーユ襲撃事件を喋っていた。余程の自信と稚気がなければ教員仲間には話せない。

校長はその茶目っ気の人柄を愛した。

※

B先輩は大学を卒業すると、大陸で活躍する夢を抱いて満州に渡った。

敗戦後、日本に戻ると新制中学校の教師になった。城内高校に入ってくると、帰り新参と称して、その明るい性格は校長を初め同僚からも好かれた。大まかで細事にこだわらず、ときに職員室での話で教員としての枠を外すことがあったが、ホーム・ルームの運営はうまかった。後でわかったことだが、在満時代若い現地人の中に溶け込んで指導し苦労していたのである。

話はあとさきになるが、先輩は、同期のKが衆議院議員に立候補したが、同期の諷刺を配った選挙違反の形式犯で高校を辞めなくてはならない羽目となったが、二年ほどして、日立製作所の子会社N電機都下の工場に勤め、のち秋田の工場長として就任した。

いまでこそ、どこの家庭にもあり珍しくない電子レンジのことだが、これを製品化したら面白いとアイディアマンとしての一面を覗かせていた。

会社を定年退職後、「特異点」という本を自費出版した。出版記念会には、元高校の同僚の中に中年の婦人が多く目立った。司

会は妙齢な婦人で、かつて先輩が城内高校で受け持った生徒たちであった。

※

A、B両先輩が、教授陣に小田原城内高教員を無断借用した犯人であった。ところが文句をいう教師は誰もいなかった。教授の名称が冠せられ悪い気持ちがないからであらう。勿論、加藤一作が大所を押さえていたのであろう。

しかしこれでは、小田原に女子短大が出来るっこない無理な話である。私は「ユートピア大学」といったのがふさわしいと軽口を叩いていた。

B先輩とは家が近いところから、休みの日というと、よく押しかけていった。酒好きな先輩は酒をかかしたことはなかった。酒も安物のウイスキーのこともあり、焼酎のこともあった。たまに銘柄の日本酒があるとお貰いもんだという。おおらかで何でも話を聞き入れていた。そのせいもあり口はばったくも次のような苦言を呈していた。

小田原では東京の女子短大に通学するが地元の城内高校の延長では地元の志願者はゼロ。夢のような海のものと山のものとも分らない「ユートピア大学」に力を入れるのも程々にしたらどうでしょう?と。

先輩は、加藤一作氏は当初、地元からの志願者は考えず熱海・伊豆方面からのを考えている。元閑院官邸だけで生徒をひきつけるものを持っていると考えているとの答であった。

短大設立に向けての仕事は、既成事実のように進められているようだった。

(つづく)

# 「道了大薩埵」の二つの碑(一)

—最乗寺参詣道の変遷にみる 足柄平野の近代交通史—

高橋 佐年

(1)はじめに

南足柄市関本の大雄山最乗寺は、末寺四千寺を数える曹洞宗の古刹で「小田原の道了尊」とも呼ばれ、初詣などでも広く親しまれている寺です。この最乗寺の仁王門の左右に「道了大薩埵」と刻まれた二つの大きな石碑(道標)が建っています。

二つの碑は、小田原町内または足柄平野内を巡って、この地に納まりました。大きな道標の移転の軌跡は、そのまま参詣ルートの変遷を示す一方で、この地域の近代の交通の発展の歴史を語るものであり、一つは大雄山鉄道の歴史でもありました。



最乗寺仁王門右側の道了大薩埵の碑

建に、五百人力の神通力で工事を担当されたのが、三井寺で修業を積んだ満位の行者、相模坊道了でした。 応永十八年開山慧明禪師が遷化されると、道了も「私のこの世での勤めも終わった。以後当山中

この読物は、伊豆箱根鉄道(本社三島市)に入社した私が定年間の六年間を、最乗寺に縁の深い大雄山線管理所という職場に勤務した時から、今日まで調べてきた記録です。

今回はまず、明治二十六年に当時の足柄下郡役所の脇に建てられた碑の話から始めます。なを、最乗寺と道了尊のことについて概略を説明しておきます。大雄山は寺の山号です。

応永元年(一三〇四)曾我の里に竺土庵を結んでいた了庵慧明禪師は、一羽の鷲に導かれて、箱根外輪山明神ヶ岳の中腹に梵刹の創立を啓示されました。寺の創

にあつて大雄山を守り、諸人を利濟すべし」と、天狗の姿と化して、山中奥深く身を隠された。

道了は十一面観音の化身であつたといはれ、当時は神仏習合で「道了権現」と崇められ、明治以降は、「道了大薩埵」と改称されました。「薩埵」とは「菩提薩埵」に略称で「菩薩」と同意語です。また「道了尊」とは道了大薩埵の「愛称」で、地元では「どーりよーさん」と呼ばれています。

(2)小田原―関本間の乗合馬車 明治になって宿駅制の廃止、伝馬・人足も廃止され、維新の新しい乗物として登場したのが、人力車と乗合馬車でした。 当史談会の大先輩中野敬次郎氏の『小田原近代百年史』では、その頃の「小田原―最乗寺参詣を、次の様に述べています。

まず小田原までは、横浜の馬車業者の川名治兵衛を代表者とした「成駒屋」という定期乗合馬車が、神奈川―小田原までを一日がかりで走りました。小田原での停留所は、新宿町通りの西端・唐人町境(現浜町四丁目一番地先)でした。

鉄道は明治五年に東京・新橋―横浜間が運転され、明治二十一年に、東海道線が国府津駅まで

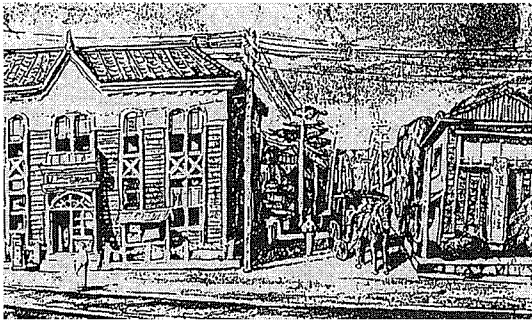
開通すると、成駒屋の乗合馬車は廃止となり、同社の馭者をしてきた上倉千代蔵が、小田原株をもらつて「上倉馬車」を興し、国府津―小田原間は独占路線で、大雄山行きは乗合馬車も運行しました。

ほかに小田原には「古郡馬車」があり、古郡三吉は網一色の出身で、上倉より大分後れて事業を始めましたが、財力もあり営業も強引で、大雄山行きを運行して二社が競い合いました。

上倉馬車の出発点は新玉新道の瀬戸酒店前、古郡馬車は寺町入口(竹ノ花・緑三公民館前)で、終着場所も、上倉馬車は塚原・さかなや旅館前まででしたが、古郡馬車が関本まで行つたので、上倉も関本・江戸屋旅館前まで延長するといった具合だったということでした。

(3)小田原馬車・電気鉄道と「道了大薩埵」の碑

鉄道が国府津まで開通した翌年の明治二十一年に、小田原・箱根の有力者は国府津―小田原―湯本間に、線路を敷き客車を二頭の馬が引くという「小田原馬車鉄道」を運行します。小田原市史・史料265には出資者として吉田義方(社長)杉本近義、二見初右衛門、福住九蔵、今井徳左衛門、寺西台助、益田



郡役所前 馬車・道了大菩薩の碑 (小暮次郎画)

勘左衛門の名が記載されています。出資の総額は六万五千円でした(福住家文書)。この鉄道は明治三十三年に電化されて「小田原電気鉄道」となります。

その頃の最乗寺参詣のことを、元小田原市立図書館長石井富之助氏が伊豆箱根鉄道(株)の社内報に寄せた文章があります。

「：京浜の参拝客は国府津で小田原の電車に乗り換え；足柄下郡役所(県合同庁舎)までくると、その角に「道了大菩薩」と刻んだ大きな石碑が建っていた。：この碑を右に見て北へまっすぐに緑新道、須藤町、竹ノ花を行き、広小路に突き当たって右に曲がり：そこを上倉、古郡などの道了さん行きの馬車(終点は塚

原)が待っている。」

市内の、明治から昭和初期にかけての風景を、数十点の水彩画に遺した小暮次郎氏の『画文集 小田原―古きよき頃―』(平成元年刊)の中の「ガタ馬車に揺られて―道了尊詣り―」には、郡役所とその角に「道了大菩薩」の道標が画かれています。道了大菩薩の文字の上方に、天狗の羽団扇のマークが刻まれているのが、分かりますよ。

絵の手前の横線は鉄道のレールです。この地は小田原町の主要地点であり、写真はがき「足柄下郡役所前」も発行されていて、そこにもレールと大菩薩の碑は写っています。

このレールは馬車↓電気鉄道として、明治二十一年から約三十三年間使われ、大正九年に東海道線の別線工事として建設された熱海線(現JR東海道本線)が、国府津から小田原まで延長された時に、撤去されました。

湯本までの電車は、熱海線の小田原駅前には結ばれて、郡役所前から約八十メートルほど西側を通り、更に湯本から強羅まで登山鉄道として延長されました。

目の前のレールが外されると「道了大菩薩」の道標の存在価値はなくなりました。(大雄山鉄道は未開通)

(4)小田原―熱海間には、人車鉄道のほかに海上航路も

小田原馬車鉄道開通のころには、熱海の有力者による小田原―熱海間の「人車鉄道」計画もありました。小田原市史・史料

268には、明治二十三年の約定書に発起人総代として熱海村の石渡喜右衛門、露木準三両氏の名があります。この鉄道の開業は明治二十九年まで延びて、甲州財閥の兩宮敬次郎の資力により実現しました。人車鉄道とはレールに乗せた箱車を、馬ではなくて人間が押すという輸送方法です。

人車鉄道も十年ほどして、小さな蒸気機関車が車両を引く「軽便鉄道」に代わります。人車・軽便鉄道を利用しての熱海方面への旅行も、著名な小説家の作品に登場していますが、もう一つ別に、熱海へは海上を利用する手段もありました。

小田原市史・史料266には、国府津の箕島清吉(国府津館)が発起人となった、明治二十一年の九月「豆相汽船会社」の資金表という資料が掲載されています。資本金は二万円です。

また熱海市史にも、「明治十六年に豆海汽船(株)が設立されたが、二十二年に東京湾汽船(株)に統合された。(中略)このほか国府津―小田原―熱海間には、不

定期に和船の船便があった：」(下巻二二六頁)という史料がありました。東京湾汽船を利用した明治の人たちの、文芸作品も残されています。

東京霊岸島を出港する航路として現存するのは「東海汽船(株)」だけです。そこで『会社年鑑』で同社の沿革を調べました。「明治二十二年資本金二十五万円で(尙)東京湾汽船を創立。二十三年東京湾汽船(株)に改組。昭和十七年現商号に変更」とあり、以下に、昭和二十四年以降、数多くの会社併合が記されていました。この章の海上輸送の話は、大雄山鉄道の開設にも関連があったものです。

(5)大雄山鉄道の発起人総代 杉山清吉氏は、東京湾汽船(株)の小田原出張所主任

大雄山鉄道の創設については、大正に入ってから熱海線着工が直接的な刺激となったようです。勿論地元の人達も鉄道が欲しかったわけですが、結果的には道了尊の講中関係の方々の出資が八十%に近いという「信仰電車」として開業できました。

大正八年の「鉄道敷設願及び仮定款作成」の発起人総代には杉山清吉と千葉胤義の二名の名前が載っています。因みに、『南足柄市史』資料編(4) 160

号に収録されている発起人は、  
 東京市・府及び大分県 七名、  
 神奈川県足柄下郡小田原町 二  
 十一名、足柄村 十二名、足柄  
 上郡岡本村 四名、南足柄村他  
 一 八名、計 五十一名です。  
 後に増資の時に、東京関係の出  
 資者が増えました。

杉山清吉氏の住所は小田原町  
 新玉三丁目で、南足柄市教育委  
 員会発行の『郷土の交通』には  
 「道了尊信者」と注釈されてい  
 ます。私としては、当時の小田  
 原町の財界に見かけない名前な  
 ので、気にかけていました。千  
 葉氏の住所は東京・青山南町で  
 すから講中関係の方です。

全く偶然に、杉山清吉の名を  
 見つけました。平成七年に小田  
 原市の郷土文化館が資料の展示  
 変えをしたとき、大正二年発行  
 の『小田原町勢一覽』（三谷藤  
 一刊）の「表面」が新たに展示  
 されました。その裏面は、その  
 当時の地図で『小田原案内図』  
 として一般に知られているもの  
 でしたが、表面の展示は始めて  
 で、そこには、町内の官庁・企  
 業・商店などの代表者名が約千  
 人も書き連ねられていました。  
 そして、小田原電気鉄道(株)、大  
 日本軌道(株)小田原支社(軽便鉄  
 道のこと)に並んで「東京湾汽  
 船株式会社小田原出張所主任杉  
 山清吉」とありました。

早速、明治の小田原町の詳し  
 い史料として小田原図書館が翻  
 刻した、片岡永左衛門氏の『明  
 治小田原町誌』を調べると、杉  
 山清吉の索引がありました。そ  
 の巻四・一八六頁には

「明治三十年十月  
 吉田義方、江嶋平八、寺西

台助、大角惣兵衛、竹内彦太  
 郎、添田利平次、杉山清吉等  
 発起し相陽(ママ)汽船会社を  
 設立し、運輸之便益を与えし  
 か後年に至りては維持に困難  
 し東京湾汽船会社に合同せり」  
 とあります。豆相汽船と相陽汽  
 船は同じ会社なのかどうか分か  
 りませんが、熱海の豆海汽船も  
 含んだ沿岸各社が短期間の内に  
 東京湾汽船に合併し、大正二年  
 の小田原町勢一覽印刷の時点で  
 は、相陽汽船の杉山清吉氏がそ  
 の小田原出張所主任に就任して  
 いたと考えられます。

また、同町誌の三十五年十月  
 には、その年小田原の海岸を  
 襲った大海嘯の罹災者に、杉山  
 清吉氏は義損品を集めて提供し  
 た篤志者の代表として、片岡永  
 左衛門助役が感激している日記  
 の記録もありました。

杉山清吉氏は、東京湾汽船小  
 田原出張所主任としての肩書を  
 持つて大正八年に大雄山鉄道の  
 設立発起人総代となり、その後  
 取締役にも就任したと考えら

れ、その背景は、相陽汽船仲間  
 —小田原の経済人の代表として  
 の存在であったと思われる。  
 なを、東京湾汽船(株)と大雄山  
 鉄道(株)の関連のことは、今まで  
 私が目にしてきた地方交通史関  
 係資料では、未だかつて見たこ  
 とはありませんでした。

### (6) 新小田原駅脇に移転された 道了大薩埵の碑

大雄山鉄道の創設の時、小田  
 原の起点には未解決な問題が  
 あったようで、大正十四年十月  
 十五日の開業時は「仮小田原駅」  
 と称し、熱海線を渡った西側か  
 ら発車しました。営業キロは丁  
 度九キロメートルでした。

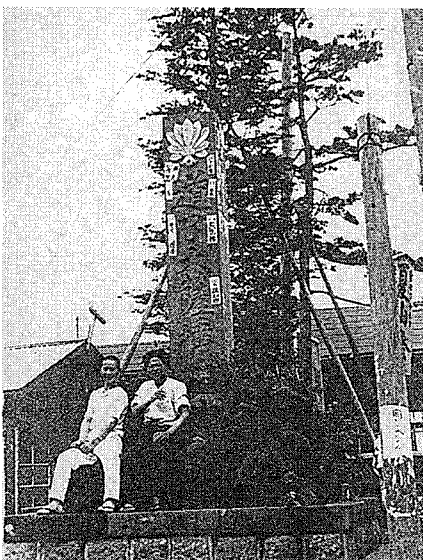
昭和二年五月に大雄山鉄道(株)  
 に入社され、つい先頃まで伊豆  
 箱根鉄道の社長を勤められた加  
 藤覚郎相談役(小田原市在住)は、  
 昭和四十年頃の同社社内報の企  
 画コラム「我が  
 青春」に、次の  
 様に書かれてい  
 ます。

「：大雄山鉄  
 道は、その終  
 点にある道了  
 尊の信者が中  
 心となって設  
 立された会社  
 で、鉄道線の  
 敷設は工事半

ばにして関東大震災にあい、  
 その後増資をしてようやく完  
 成したものでした。しかも当  
 初の鉄道線の起点は、現在国  
 鉄線と交差している先のとこ  
 ろにあったため、乗客は国鉄  
 駅からそこまで、約五百米ほ  
 ども歩かなければならなかつ  
 た。：」

加藤相談役が入社寸前の昭和  
 二年四月に、第一次の延長工事  
 が行われました。線路は熱海線  
 をくぐって、現在の谷津ガード  
 の前の「新小田原駅」まで約三  
 百米メートルほど延長され、省線  
 小田原駅からこの鉄道に乗換え  
 ていた参詣客の、歩く距離がそ  
 れだけ短くなりました。

そこには本社事務所・駅舎も  
 建てられ、何時の間にか郡役所  
 脇にあった「道了大薩埵」の道  
 標が移されました。杉山清吉氏  
 と大雄山鉄道の関係が分かる



新小田原駅脇に移された道了大薩埵の碑



昭和30年代の現小田原駅 右下隅に道了大薩埵の碑

間もなく支那事変が勃発し、大雄山鉄道(株)は昭和十六年に、戦時統合令により駿豆鉄道(株)(三島市)と合併します。(その時から加藤相談役は三島本社通勤。筆

本線からの参詣客は、構内連絡通路をくぐり、この大薩埵の碑を見ながら乗換えられることになりました。(小田原駅は現在東西自由通路の大工事中)

と、移築は当然のことでした。その碑のまわりで遊んだことがあるという人の話は何度か聞きました。それを証明するものがありませんでした。平成七年に、私が加藤社長(当時)のご自宅を訪ねたとき「高橋君が探している写真はこれかネ」と渡されたのが十二頁の写真です。写っている二人は、若かりし日の加藤相談役と、同僚の渡辺さんと説明されました。このときの大雄山鉄道の山本栄次郎社長は東京の人で、渡辺さんも山本社長に連れてこられた東京の人ということです。

(7) その後の大雄山鉄道ともう一つの道了大薩埵の碑

昭和九年十二月に丹那トンネルが開通し、熱海線は東海道本線となりました。大雄山線も、その翌年の十年六月に現在のJR駅構内まで乗り入れる第二次の延長工事が行われて、九・六キロメートルの現在の営業キロとなります。

この時、新小田原駅は廃止となりますが、既に周辺の町づくりがされていた為、細長いホームの「緑町駅」が開設されました。レールは撤去され「大薩埵の碑」も新しい駅構内に移転されました。その場所は先頃まで駅売店があった辺りです。昭和三十年代の小田原駅の古い写真の右下隅に、大薩埵の碑の下部が微かに写っています。東海道

者入社。昭和二十八年には直属上司の会計課長。やがて終戦を迎え昭和三十三年、駿豆鉄道(株)は社名を伊豆箱根鉄道(株)と変更。「大薩埵の碑」は、小田原駅ホームの増設で、三度目の移転をします。

その移転先は私が勤務していた頃にも建っていた終点の大雄山駅前と、誰もが思っていたのですが、それは間違いでした。話の起こりは、小暮次郎先生の画文の『道了尊詣り』(十一頁)が、昭和六十二年二月の神奈川新聞に掲載されたことで、大雄山駅の碑には「天狗の羽団扇」が付いていたことがからで

す。大雄山駅前の「碑」は、天明二年(一八二二)の昔に国府津・親木橋の脇に建立され、その後松田駅の脇を経て移築されたものでした。実は、「道了大薩埵」の碑は二つあったということ、もう一つの碑のことが次号のお話します。

疑問の解明は、昭和三十三年から最乗寺に勤められた阿部登綱さんの「小田原駅ホームの碑は、仁王門の右側に直接移築されました」という記憶抜群のお言葉でした。改めてこの碑(十頁)に對峙しました。塔身だけでも二メートル五十センチあり、これが一メートル程の乱積の石座に囲まれ「天狗の羽団扇」も

浮彫りされています。

建立は明治二十六年九月、碑の右面には吉田義方、竹内彦太郎、江島平八、水田清助、本多正八、大角惣兵衛、本多復吉、門松由兵衛、大島治郎兵衛と寄進者名が大書され、その下部、裏面、左面には小さな文字で無数の人名が刻まれていました。

この小さな文字については、平成九年からの足柄史談会の「道標調査」に私も参加して、拓本により略住所も入った三百二十五名の名前が判読されました。寄進者は小田原町民に限らず、隣接市町村の方々などの名前もあり、関係者が参詣客の旅の安全を祈念する心が伝わってくる思いがしました。なを拓本に、杉山清吉氏の名前は見当たりませんでした。(全文は「史談足柄」35集に掲載)

筆頭の吉田義方氏については、県史・人物編からの抜粋で、天保十一年(一八四〇)吉浜・向笠家に生まれ、小田原桔梗屋十二代の女婿。明治期の小田原町議・町長。一八八八小田原馬車鉄道初代社長 一八九〇県議当選 一八九七相洋汽船(のちの東京湾汽船会社)設立。明治四十一年(一九〇六)没。地方行政や教育関係に功績大なことが記されていました。(たかはし・さとし 郷土史研究家 小田原史談会副会長)

## 私の青春 ⑨

## 続 明野教導飛行師団

菅沼 博

明野教導飛行師団における生活は、憧れていた飛行機の操縦の教育は全然なく、毎日整備教育が主であった。

朝から夕方まで発動機の気化器やらピストンやらの現物を手に、整備服を着て悪戦苦闘していた。

その間にも、九二式重機関銃の分解結合、そして高射用托架を付けた射撃要領まで訓練させられた。

高射機関銃用の掩体を飛行場の片隅に作成し終えるところに機関銃を据付け、対空射撃訓練を繰り返して演練した。

対空射撃の演練といっても我々に命ぜられている射撃要領は、宇都宮飛行学校において教育された刺し違え射撃であった。

我々に正対して射撃してくる敵機に対して、距離のみを考えた射撃要領で、左右に飛行する敵機に対する射撃は許されていなかった。

勿論、我々の射撃掩体の周囲は使用出来なくなった戦闘機、ベニヤ板で作った本物そっくりの偽飛行機が並べられていた。

その中に作られた高射機関銃陣地のため、敵機が偽飛行機であると判別しない限り、敵機が急降下して機銃掃射してくれば、必ず正対する位置にあった。

昭和二十年の春の頃である。この頃になると、空襲警報は毎日のように発せられた。その度ごとに陣地に入り高射機関銃に弾丸を込め、正対して急降下してくる敵機の来襲を待った。

空襲の度に偽飛行機、破損飛行機と見破られてか、射撃する機会は遂になかった。

今になって冷静に考えてみると、射撃する機会があったとすれば、生きている確立は少なかったのではなからうか。或は片手ぐらいいはもぎ取られ暗い生活を送っていたかもしれない。

この様な空襲の合間にも発動機の整備教育は続けられた。整

備教育が終了しないと操縦訓練は出来ないという話であったが、後で考えてみると、当時訓練のガンリンが無かったというのが事実のようである。

戦争は若しという事は無いが若しガンリンがあったとすれば、私はとつくにあの世に特攻で行っている筈である。

毎日、発動機の試運転の轟音で夢を破られたが、先輩の十六期生の整備上等兵達は一人前の装備兵であった。機付き整備兵として責任を持たされ油で黒光りした整備服で飛行機を整備していた。

我々十七期生は分解した発動機の前で部品類と取り組む毎日であった。

その頃の事である。正確な月日は忘れてしまったが、春となって鳥の麦の葉色の濃さが増し始めた頃であった。

警戒警報が発令され、飛行場のエプロンにある四式戦闘機(疾風)を退避掩体へ移動するよう命ぜられた。

分隊長以下数名の我々は、機体にとりつき、翼や胴体に手をかけ退避壕へと移動させていた。

移動させる初めは、機体が指揮所の近くのエプロンのコンクリート上にあつたので、たやすく動き始めたが、コンクリート

が終わり凸凹の地面上になると移動は仲々骨が折れる作業だった。

確か、それは午後のことであつた。日は西の端に傾いていた。戦友達と、掛け声を出し合いながらエプロンから二三百米くらい離れた頃であつた。

「敵機」という叫び声が突如として耳に入った。

操縦席の左主翼の近くで機体を押しながら振り返ると銀色に輝いた戦闘機らしきものが、滑走路の西端上で翼を傾け、機首を我が方に向けて始めていた。

敵機は滑走路の西端にあり、我々は滑走路の東端を過ぎた誘導路上であつた。

即ち、敵機と我々との一直線上の間には千数百米の滑走路とエプロンに翼を休める数十機の四式戦闘機があつた。

敵・滑走路・四式戦闘機と続く次の延長線上には我が身と、退避中の四式戦闘機があつた。

敵機が滑走路に平行するように機体を持つてくれば、機銃弾は数秒の内に我が身の周囲に振り注ぐことは必定である。

「散れ」或は「退避」の号令を耳にしたように思う。

私は敵機に顔を向け注視しながら我が身を隠す場所を探した。鳥の中の誘導路で、身を隠す場所は最初から無かつた。

敵機に顔を向けながら退避するのは、飛行軸線に自分自身が合ったら弾丸に撃たれるという事を知るためである。

その間にも敵機は機銃掃射を開始し始めたらしい。両翼からは「パツパツ」と機銃の発射煙らしきものが吹き出している。

私は島の中で顔を敵機に向けながら自分の身を隠す所を探し続けた。

私は退避中の四式戦闘機からあまり離れられないと悟っていた。この退避中の戦闘機に敵弾丸が当たれば、燃料に引火、爆発し炎上するに違いない。近くにいる私はその煽りで吹き飛ばされるであろう。

えいままよ、とばかりに十米か二十米を横つ飛びに走り、島と島を区切っている段差が若干ある場所を目にするや、そこへ脱兎のごとく身を躍り込ませた。

島と島を区切る段差は三十糎もあつたであろうか。とにかく敵に近い方の島が若干高かつた。

どんな敵機が来たのかという興味があり、弾丸の飛んで来る怖さはそれ程でもなかった。

毎日のように先輩を特攻に送り出し、また、訓練事故による飛行兵の死を目にしていることもあり、自分も遅かれ早かれ、

先輩の後に続くんだと思つてい

たからなのかもしれない。私は島の段差になつていてる所に身を躍り込ませるや、仰向けになつてピタリと段差、それもたかだか、三十糎くらいしかない所へ身を横たえた。

これだけの土の厚さでは敵の弾丸を防ぐことが出来よう筈もない。

しかし、空を見上げる格好で横になり、視野に飛び込んでくる敵機を観察しようとする。敵機が我が顔前数十米の高さの所を横切つて行つた。

それは彩色していないジュラルミンそのもののP51ムスタングであつた。

水冷発動機の精かな型をした戦闘機で操縦士の飛行眼鏡までよく見える低空であつた。

私が仰向けになつて身を隠していた上空約五十米位の高度を敵機は、機銃掃射を終わり上昇の態勢をとりながら、機体を傾け、右に左に全速力で退避して行つた。

三、四機の敵機の通り過ぎるのを仰向けになつて見送つた頃から、私も心に余裕が出来てきた。

ようやく高射機関銃や高射機関砲の対空射撃音が鮮明に聞き取れるようになった。

じっくり観戦しようと思つて気を落ち着け周囲に気配りを始めた時である。私の上空でプロペラがゆっくり回っているP51が目に入った。

他の機は皆五十米位の高度を全速力で左右に機体を傾け退避して行くのにその敵機は上昇姿勢を取り私の上空二百米位の高度を、よたよたとゆっくりとしたスピードで過ぎようとしていた。

ゆっくり回るプロペラ、その回転は目に見える程であつたので、エンジンには既に被弾し動いていないようである。にもかかわらず、敵機はなおも上昇姿勢を取り続けていた。

私は仰向けの姿勢のまま、その敵機を注視していた。飛行機

の速度は上昇姿勢のため段々と遅くなり、浮力が勝つか、重力が勝つかの速度になつてきた。あとは地面に落ちてくるなど思つて見ていたとき、機首を上

空へ向けていた機は、くると左横転して上昇背面飛行になつた。その時に高度は、約二百メートル位であつた。

上昇背面飛行となつた時、スピードが無いP51には、すでに浮力が無かつた。上昇背面の飛行姿勢から下降背面の姿勢へと、機体は放物線を描いて機首を若干下に向けて落下しはじめ

た。

下降背面で落下し始めたその時、操縦席から何か飛び出たように見えた。その時は、気が付かなかつたが、後になつて解つたのであるが、それは操縦士であつた。

機首をやや下に、背面になり、しかもゆっくり回るプロペラを見せながら、敵機P51戦闘機はスロウモーションの映画を見るように、三、四百米離れた雑木林の向こう側に音も無く落ちて行つた。

この敵機を見始めてから落ちてしまふまで、七、八秒の間であつたであろう。

敵機の機銃掃射は一航過のみであつた。宇都宮で経験した空襲はグラマン戦闘機による二航過の機銃掃射であつたが、明野では対空機関銃部隊が優秀であつたためか二航過目の反復の機銃掃射は無かつた。

雑木林の向こうに落ちた敵戦闘機は、本部の東側近くに位置していた高射機関砲部隊により撃墜されたことは明らかであつた。

私の知っている限りでは、この時の対空射撃部隊は、この機関砲部隊より他に無かつた。

飛行機の退避作業が無ければ、我々も掩体の中から、高射機関銃で敵機に射撃をしていた



に違いなかったが、我々はその時、島の中で動けずにいた。彼等の部隊は、我々が近くを通る時、何時も対空射撃訓練に明け暮れていた。

二連装の機関砲の射手はバンドで砲座に固定されている。そして射手の射撃位置は地表から一〜二米の高さにあり、周囲には掩体らしきものは無く、水平射撃も出来る剥き出しの対空射撃部隊である。

我々の対空射撃は掩体を作り、その中から高射機関砲を射撃する。勿論、我々の射撃は刺し違え射撃であり、彼等の射撃は射程距離内にある敵機の全てということとで与えられた任務がそれぞれ違っていた。

しかし、彼等は剥き出しの射撃陣地であったので、食うか食われるかの訓練に明け暮れていた結果と、敵をやらねば剥き出しの自分の身が危ういという切迫感から良い結果が出たのであろう。

一航過ぎの機銃掃射が終わる、数分もたつと今までの爆音と射撃音は止み、静けさが戻ってきた。

誰いうとなく我々は落ちたP51の方角へと駆けだしていた。誰かが叫んでいた。

「操縦士が落下傘でおりたぞ」  
駆け出していた我々は、その

声を聞いたとき、腰にある帯剣を抜くや右手に持ち、物陰を注意深く見張りながら、落ちた敵機の方へ、ゆっくりと近づいて行った。

敵のP51戦闘機は煙も出さず、墜落する時に見せた背面飛行の姿勢のまま、即ち、腹を上にして、やや機首を地面に突っ込んだ形で麦島の中に、若干破損した姿でぶい銀色に光って横たわっていた。

その敵戦闘機の周囲に集まった我々の誰かが、若干地面からもちあがっている尾翼の一端に手をかけ、持ち上げようとしていた。

我々は誰いうとなく、一斉にそれに協力した。我々は敵の操縦士が操縦席で生きているに違いないと思つて、この行動に出た。

スロウモーションのように背面でゆっくりと墜落したのを目撃した私は、操縦士が生きているのを信じていた一人であった。

浮きかげんであった右主翼と尾翼に幾人かがとりついて、声をかけて持ち上げると、土にめりこんでいた操縦席が見えた。

開け放されている風防の中を覗きこんだが、泥にまみれてよく見えなかった。そこで我々は操縦士を探した

め、機体を一〜二メートル横にずらすことにした。

「セーノ」と言う掛け声で私は尾翼側で皆と力を合わせ機体を横にずらせた。その時、米兵の操縦士が横にうずくまるような姿で主翼の下、右主翼の付け根あたりにはいた。

落下傘は開いていなかったが、彼の背中の傘は出ることは出たらしかった。しかし高度が低かったため、開傘する時間的余裕がなかったように見られた。

開かない落下傘が彼の背後に引き出されたような形でまともだった。

彼はと見ると、肩から腹にかけて日本刀で袈裟切りに切り下ろしたような形になっていて、内臓がはみ出していた。

あの戦後街でよく見かけた進駐軍のカーク色の軍服と飛行長靴を履いていた。腕はなぜか顔を覆い、その顔はよく見えなかった。横向きにうずくまるように身体をくの字に曲げていた。

その時まで白人に馴染みがあった我々は、全員が一瞬ハツとして息をのんで見つめた。

白人の戦死体を見たのは、後にも先にもこれが初めてであった。袈裟がけに切り下ろしたような傷は、操縦席から飛び出し

た時にプロペラに触れたのが原因であったに違いない。

背面飛行の時に操縦席から何が飛び出したように思われた物は、彼であった。

彼は自分の機体から飛び出す瞬間まで五体健全で生きていたに違い無かった。

それに銃撃後エンジンに被弾したため僚機と異なり高度をなるべく取るように心掛けたこと、落下傘降下をするに都合よい背面に機体を持つて行ったこと、しかしながら、彼の計算に少しの誤算があった。

それは高度をとればとるほど落下傘降下の安全性が増すため、機速がもう無くなっているにもかかわらず、強引に上昇を続け、機速の無くなる頂点で背面としたことである。彼の計算は背面飛行で安全バンドを外せば、機体に浮力がある限り身体はストンと落下する。後は落下傘が開くの待つという寸法であったのであろう。

彼の誤算は、機速の無い背面飛行の飛行機はエンジンの重い方、尾翼よりも機首の方が先に下がり始めるという計算が疎かになつていたのではないだろうか。

機体に機速があり浮力があるうちに飛び出せば、彼の落下傘は開いたに違いない。問題は高



度のみであった筈だ。取れるだけの高度を取ってから舵の利く、ぎりぎりのスピードで上昇背面飛行に横転させ、操縦席を下側にした彼は「してやったり、これで生きれる」と夢中で操縦かんを放し、空中に飛び出したに違いない。惜しいかな高度を欲張り過ぎていた。機速の無い機体は背面のまま機首を下に向け始めていた。背面となった機体の操縦席から飛び出した彼は、機体の落下速度と同じになってしまっていた。彼の身体は背面落下しながら、ゆっくり回っているプロペラに触れたのである。ゆっくり回っているように見えるプロペラでも、その先端のスピードは新幹線以上であったであろう。

その時はそれなりに「これが戦争なんだ」と理解していた。しかし、臓物を出した白人米兵の死体を目にしたのは初めてであり、私のショックは大きかった。直ぐに憲兵がやって来た。我々は憲兵の指示により直ちにその場を立ち退かされた。営内に帰り、夕食の時間になっても、あの湯気をたてていた臓物が喉の裏に残り、食事が喉を通らなかつた。軍隊の中でしかも少年時代の食欲旺盛な年代にもかかわらず、今でも、鮮明に思い出す事柄である。戦争というものは、人間と人間の殺し合いである。人の血を見て、或は、人間の臓物を出して死んでいるのを見て「食事や喉を通らないとは何事だ！」と言う人がいるであろう。しかし、あの当時初めて米兵の死体を見て、戦意を無くしたとは思わない。ただ日本軍人の戦死体と一種異なつた光景であつた印象が心に残っている。私が当時所属していた部隊では、飛行機による墜死や事故死を数多く目のあたりにしてきたにもかかわらず、米兵の死を見ても、このようないふ思ひにさせたり、今もって不思議に思えてな

らない。今は平和な毎日が続いている。この平和が破れ、我が祖国が戦場となり、敵を殺し、隣人が血を出し、また、戦友が弾丸に倒れたとき、それにも平然として、我が身を投げ出して祖国を守り抜く気概のある青年が何パーセントいるであろうか。

## 時代を映し出す作文二題

### 戦後の混乱のなかに明るい

#### 希望の灯が――

おつかい

一ノ四 常磐 秀一

先週土曜日お母さんに頼まれて、出来上つた洋服をもつて二宮へ行ってきました。一人で汽車の乗って出かけるのははじめてなので少し不安を感じたが、僕は中学生になつたのだからわからなければ尋ねようと思つて出かけた。駅で「二宮まで子供片道いくらですか」ときくと、「八円」といふので、十円出すと、出札のおじさんは、ぶつきらぼうに「おつりがありませんよ。」と言つてすましこんでいます。僕がもしもじしてしていると、「困つたなあ」

平和で幸せな毎日が続いているなあ、とつくづく噛みしめて思う今日の時代である。戦争の無い平和な日本、そして健康で不自由のない生活、これからもずっと続いて欲しいと願っている。(つづく)

といて、二円お釣りをくれました。ほつとして汽車にのつたが、どうしても少し感じのよい言葉が出ないかと不愉快□□□だいいつ、やがて二宮についた。二宮のおばあさんは父母のなくなつた孫二人のめんどうを見ながら暮らしている気の毒な身の上です。それで少しでも役立つ仕事をして上げたいと思ひ急いで裏へ行つて薪を割つて束ねてやりました。自分で進んでやる仕事は、家ではいやいやながらやることよりも大へんはかどります。おばあさんに何回もお礼を言われてうれしくなりました。日曜日におみやげをもらつて

かえるとき小田原駅からのバスの中で渡辺先生に席をゆづっていただいで大へん有難く思いました。

『二中校報』昭和24年7月発行

かたみの腕時計

二年 興津 好治

五月五日の子供の日の朝お母さんがもう中学二年生だからお前もほしだいだろうと筆筒の小引き出しから出して下さった物。僕は何だろうと飛び起きた。それは戦地でつかった古びた腕時計であった。二重にふたがしてあつてそのフタ皮はお父さんの汗ですっかりさびていた。兄さんと二人でさびをとってこじ空

けて見ると中には小さな円形をした時計。この裏には兄さんと妹と三人を写した、僕が四、五才位の時の写真が入っていた。指の先位のこの小さな小さな写真を三人で見たが急に胸がしびれる様な感じがした。三人の行く末を心配していつも時計の中に入れて下すつたのだ。  
「お父さん……」とお腹の底から呼んで見たくなった。お母さんは僕に「これをお父さんだと思つて大切にしなさい」といった。外地で苦勞したお父さんの魂をなぐさめるため、三人で一生懸命勉強してお母さんの手伝いをしなければならぬと思つた。



『二中校報』創刊号

今日は、ぶん解掃除をしてもらつた時計が出来てきた。かすかな音をたて、僕の左うででなっている。しつかりやれよしつかりやれよとお父さんのほげましの声の様だ。

『二中校報』昭和26年5月発行

※

以上二つの作文が載る「二中校報」は、復刻版によるものだが、復刻は武田敏治さん個人による。武田さんによれば三年生の時に創刊されるようになったという。自分の書いた工場見学記が載つた以外は、どんな内容だつたか記憶になかった。しかし、『校報』が何処かにあつたなら六・三制教育発足当時の雰囲気や伝える記事が載っているのではないかと考え母校に問い合わせしてみた。しばらくして白鷗中学校の栢沼校長から、やつと見つかったという返事があつた。校長は捜し出すのに苦勞したらしい。五十年以上も倉庫の中にあつて、黴臭さとシミだらけで破損が甚だしく欠号もあつた。だが、当時を知る資料としての価値を見ることができた。

復刻版はタブロイド判で74ページに及ぶが、片面印刷のため実質は37ページである。内容は、校長の訓話、学校から家庭への連絡事項、PTA役員や識者の話や在校生や卒業生の動

向、その中には「二中銀行」の生徒の役員や、卒業生の投稿など載せている。それに生徒の作つた詩・俳句・クイズなどを収めている。それに校報発行費用の節減のためにか広告まで取っている。その会社の中には、すでないものもある。

それにしても盛り沢山の内容だが、何といつても、当時の時代の反映があるのが興味深い。

※

二つの作文を読んで感ずるところは、二人とも健気なことだ。大体この時期の少年たちは、同じ傾向を持っている。何故だろうか。

戦争中、小国民としての自覚と責任を持たされ、戦後は一八〇度転換の自由主義の洗礼を受け、一代にして二つの経験を重ねている。母親にしても同様で、戦中戦後の物資の乏しい時代に数多くの子供を抱え、明日への希望を持ちながらきちんと躰を育ててきたからであろう。家庭崩壊、学級崩壊など伝えられる今日この頃と対比すれば、明らかである。

現在、日本の教育は迷走している。それだけに家庭教育、社会教育を含めての教育がいかに重要であるかを思い知らされる。

(岡部忠夫)

江戸時代初期田島に穴窟

## 風外慧薫禪師 四

野地 芳男

この章では、既に風外禪師の書画について述べてきた。重複する所がある事を許して頂き、今少し記すこととする。

書画の評価は、「画乗要略」・白井華陽著「天保二年版(二八三)に「余嘗觀其達磨及布袋図。与松花堂相伯仲」とあり、風外画僧の書画は、松花堂昭乗の書画と肩を並べているとしている。

前述したように、松花堂といえは、江戸初期の学僧・書画家であり書風を滝本流、水墨画・彩色画に長じ、和歌・茶道の達人であり、しかも「寛永の三筆の一人」である。

※三筆とは、わが国書道史上において、三人の優れた能書家を意味したものである。

とすれば、風外書画は、彼等に並び称せられていた様で、相当な書画の達人であった。松花堂に次いで、宮本武蔵の書画であるが、各々はその後、古文書・古記録にて世に出され、評価を受けてきた。

この両者に比し、風外上人の

書画は今日まで余り評価されず、むしろ地元からして忘れられた傾向があったのではと思われる。

そこで、最近になり、数少ない書画の専門家からみた風外画の評価を追ってみた。

まず、墨画は日本では、鎌倉時代に中国より伝わり、当初は禅宗の趣味と関連して行われ、室町時代に最も盛んになったと云われる。ここで特記すべきは、風外禪師が好んで描いた達磨画・布袋画及び自照(自画像)は、いづれも禅の厳しさを心を込めて画いていることである。

しかし、当時を調べていると、水墨画を描く画僧と云えば臨済宗の禅僧である。何故か曹洞宗の僧である風外慧薫禪師が、実に素晴らしい墨画を遺したのか? 謎めいている。

更に面白い事には、この時代の人として、前にも述べた通り書画・彫刻の芸術家宮本武蔵と共通点が多いのである。

宮本武蔵(生涯六十二歳)は関ヶ原の合戦に参戦、或いは

佐々木小次郎との決闘等で後世に伝えられているが、風外禪師と同様に、五十五歳を過ぎてから現存する秀でた書画を遺している。

この時代、達人と称せられた偉人の行動には、必ず空白の期間があったと言われる。これは風外禪師・宮本武蔵にも共通して言えることで、「人知れず自己を拓磨した」ことが素晴らしい書画を描きあげたと、考えられる。

## 9 風外窪(岩窟)と風外滝の保全

曾我丘陵の一端に位置する高山と弁天山の間に現存するこの岩窟は、田島地域の数少ない歴史の遺物である。これは貴重な横穴古墳であり、風外禪師が穴居した時代から約九〇〇年前に造られている。即ち今から約一三〇〇年前のものである。横穴古墳は七〇〇年代に大陸から九州に伝わり徐々に東に移り関東にも見られる様になった。特に曾我山・大磯丘陵に多く存在している。

横穴古墳は、その地に住み着いた豪族の墓といわれている。従って、この田島の地には相当古くから人が住み着いていた様だ。また、現存する遺蹟には、奈良朝時代の物もあり、歴史的にも人が住む環境が優れていた

と云う証でもある。とするならば、この風外窟を始めとする多くの横穴古墳を大切に保全をしなければと思う。

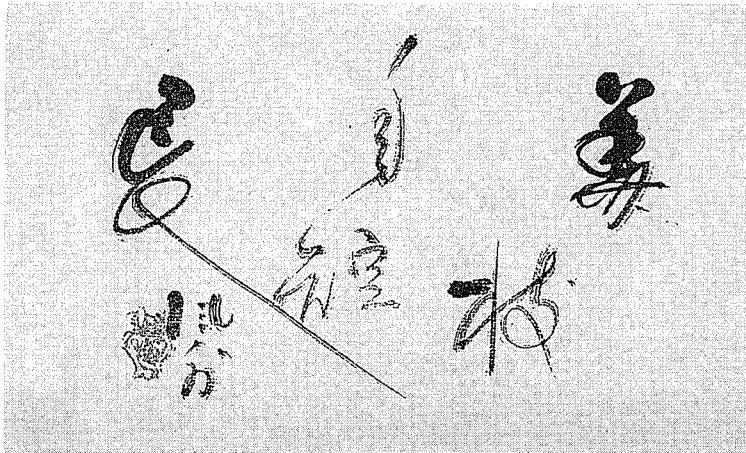
又、この窪地にある滝「風外滝」は昭和三十年代に東海道新幹線の弁天山トンネルを掘り抜いたために流れが止まり、現在は残念にも空滝になってしまった。この滝についても、当時を見聞した人達から情報を集めて、滝の大きさ・水量・高さ・形態等を記録し歴史的にも保存すべきであると思われる。

\*以上の事は、申す迄もなく、土地所有者のご理解・ご了承なくできることではないが、記して置きたい事は歴史的遺産である点である。

## 四 風外慧薫上人への地元認識と今後の伝承

風外慧薫禪師については、前述したように時代背景・禅僧の書画・漢詩・古文書の伝説等より、その足跡を逐次調べているが、現在地元の方々には理解されていないように思える。

一部古老の口伝・書画により、個人の理解で伝わっている程度で必ずしも十分とは思えない。即ち、その評価も高僧であった、否乞食僧だ、いや大変な名僧だよ等、マチマチである。更には、風外慧薫画僧の書画より風外本



高禅師の書画の方が優れている等々・いろいろな見方・解釈があるが、これらは、あくまで個人の見方で当然の事と思う。そこで重要なことは、地元人である我々が、禅師の書画・住んだ岩窟・専門家の書かれた評価・当時の時代背景を学び、出来る限り真の禅師を知ることが大切で、私達が歴史的に価値を認めてこそ、風外上人も浮かばれる事と思う。

そして、今後も、故郷の人々に伝え、歴史的遺蹟・口伝とし

て遺して行くことを願っている。

参考文献

- 風外慧薫禅師とその作品 一九六〇年 平塚市文化財保護委員 高瀬慎吾
- 風外慧薫の研究 一九七〇年 風外慧薫研究家 松本 敬
- 相模の禅僧・風外慧薫(作品展) 一九九二年 平塚市美術館・平塚市博物館
- 風外慧薫 澄徹無限の書画 一九九〇年 季刊・禅画報第十二号 花園大学
- 特別展・風外道人遺墨展 一九八二年 小田原市郷土文化館分館 松永記念館
- 漂白の聖たち 一九九四年 西海 賢二
- 真説・宮本武蔵 一九八三年 司馬 遼太郎
- 宮本武蔵とは何者だったか 一九九八年 久保 三千雄
- 歴史街道 二〇〇〇年 竜門冬二・渡邊昇一・長尾剛・鷲田小弥太・小坂雅志・戸部新十郎
- 羅 創刊号(文芸同人誌) 風外の月日 一九九六年 吉田 道児
- 羅 第二号 風外の月日 一九九七年 吉田 道児
- おだわら文芸(第五号) 一

一九九五年 吉田 道児

文献関係(古文書・絵画展)

古文書等

- 月城禅師語録：(延宝八年・一六〇) 「風外道者ノ伝」 最も古い書：
- 日本洞上聯燈録：(享保十二年・一七二七) 領南秀怒が編集した古仏七三四人の伝記集 今から約二七二年前にかかれ、風外禅師について最も要点が把握出来る書。即ち、生まれ―修業―成願寺―曾我山岩窟―小田原城主・稲葉正則藩主―真鶴―伊豆の竹溪院―金指にて死去、等が記されている。
- 画乗要略：(天保二年・一八三一) 白井華陽が著した三八〇余人の略伝書 此の書には相州小田原城外山中之岩窟二居シ、米五升等が記されている。
- 名家略伝：(天保十二年・一八四一) 山崎美成 通称・長崎屋新兵衛の著作、書肆―名家六九人の略伝主たる内容
- 少児輩求むる時は快くその求めに応じ画を与えた。小田原藩主(稲葉正則)よりの長興山への要請を断る等。特記すべきは、鉄牛和尚との会話「世を通れるはいとやすし、出家も成やすし、後の出家は成りがたし。また、世は捨て安く、はた捨てがたきものぞかし：」 笑談
- 名家墨蹟鑑定便覧：(嘉永六年・一八二五) 川喜多 真一郎の著 内容は画乗要略の再版的なもの。
- (註) 風外慧薫・風外本高・風外焉知

の三者を混同

本朝画工便覧(明治二四年・一八九一)

- 横須賀 安枝の著
  - 古画備考五一卷(明治三七年・一八七二) 朝岡 興頼の著
  - 禅学要鑑(明治四〇年・一八七七) 相沢 恵海の著
  - 近古禅林(大正八年・一九一九) 森大狂の著
  - 書画鑑賞芸人名辞典(昭和五年・一九三〇) 橘 宇坤の著
  - 風外 和尚(昭和六年・一九三二) 風外会
  - 大人名辞典五卷(昭和七年・一九三三) 奇僧風外の事蹟・松本 越の著
  - 風外 禅師(昭和一〇年・一九三五) 足柄下郡郷土読本
- 編集後記
- 風外上人については、古文書・絵画展・郷土歴史研究家等が明治時代以降、各々著しているが、近年には著名な学者・専門家が、この風外面及び書を評価している。当時、即ち江戸初期における墨画・書・詩いずれも、その学識・芸術面また禅僧として優れていたことは、上人が籍した曹洞宗に於いても、称賛されていた証が随所に残されている。
- しかし乍ら、風外禅師が最も活躍した時期、即ち世に遺した書画は、私達の故郷曾我山(田島・上曾我)時代が出发点であり、何故この地を選び、しかも岩窟に籠もり描いたのか? 謎の多い高僧だった。

それ程に、地元の方々による従来迄の評判・関心等に若干でも参考になればと記した訳である。歴史については、未熟な点が多く調査・文章のまとめ・内容等不十分な所を、お詫びと共に、さらなる情報収集により研究し、役立つ書を表すべく研鑽したいと思っている次第である。

風外上人が好んで描いた墨画につて  
(補足・解説)

1 墨画は日本に於いては、鎌倉時代に中国より伝わり禅宗趣味と関連して行ってきたもの、特に室町時代に盛んであった。そして、水墨画は禅宗寺院の礼拝のための霊像・教義の説示画として画かれた。

そこには単に物象を写すだけでなく、思想さえ越えた境地と映られる昇華を志向した。絵を画く者の教養の深さ・厚みが画の価値になり、確固たる思想と

教養による作品が残された。飄々として、画に禅の厳しい精神が込められていると言ふ。辻東京大学教授によると、この筆技法は十五世紀(室町時代)に墨絵画僧が代表的なもので、達磨・布袋の系脈を引いている。この世界では臨済宗の僧が描いていた。となれば曹洞宗の風外上人の画は貴重である。

上人は他宗にも及ぶ勉強心の旺盛な僧であったに相違ない。多くの風外面は、線の美しさ・線の伸ばし、そして書の濁り・澱みがない清美さ・清澄さ、更に、讀は古人の名句・自詠の詩等からみると決して技巧では書かれていない。風外面僧以外に画けないと言はれており、要は世間離れた画であると思ふ。

特に著者は、十七世紀の前半では次の三者に注目する。九州は宮本武蔵・京都は松花堂昭乗・相模では風外慧薫の画家である。



蘆葉達磨図

次に、風外面の対象についてである。次には、風外面の対象についてである。

○達磨・蘆葉達磨について

達磨大師―禅宗を中国に伝えた初祖であり、日本でも開宗の第一祖(禅僧の始祖)。生国は南インドともいわれる。また円覚大師・達磨大師ともいう。

\*円覚とは、円満な悟り、一切衆生の中にある悟りの本性である。

蘆葉達磨について、これは達磨大師が梁の時代に海を渡り、梁の武帝と会見した。その時、「無功德」「不識」の語で答えた問答をした、この時蘆ノ葉に乗って揚子江を渡ったと伝えられている。

この画は中国のみならず日本でも、当時には盛んに蘆ノ葉に乗る達磨画が画かれていた。宮本武蔵もさまざまな蘆葉達磨を書いていた。

○布袋について

後梁の禅僧で、相は福々しく・円満で身体は肥大で腹を出して、常に袋を担って喜捨を求めて歩いた。世人は弥勒の化身とも称した。弥勒菩薩(七福神(七柱の福德の神)の一人。七福神Ⅱ大黒天・恵比寿・毘沙門天・弁財天・福祿寿・寿老人・布袋)

○寒山拾得について

唐代の僧で、天台山の近くに住み、二人とも奇行が多く豊干に師事した。絵では寒山は経巻を披き、拾得は箆を持って描かれている。この画は鎌倉末期以後に漢画系諸派や狩野派の画家に好まれて描かれた。

寒山は文殊の化身Ⅱ文殊菩薩といわれた。即ち仏の知恵を象徴する菩薩である。今でも「文殊の知恵」の諺が知られている。

拾得は普賢の化身と言はれた。普賢菩薩Ⅱ延命菩薩  
文殊菩薩・普賢菩薩とも釈迦如来の脇侍であり、白象に乗って待している。

○瀟湘八景図について

この画は、風外上人が八十歳台に描き、成願寺に秘蔵されている。

詩文・禅の語録等の理解力が高く、枯槁で簡潔しかも幽妙である。成願寺の画は、瀟湘夜雨図である。

\*瀟湘八景Ⅱ湘二水付近の八ヶ所の佳景。即ち、

平沙落雁・遠浦帰帆・山市晴嵐・江天暮雪・洞庭秋月・瀟湘夜雨・煙寺晚鐘・漁村夕照

さかわ  
酒匂史談

⑩

かわせはやお  
川瀬 速雄

2 その他の堰

◎ 黒埴堰

中新田より西酒匂、字荒木を流通し海に入る。九町、巾三間、八間、深さ一尺、二尺。酒匂堰に次ぐ大堰で、菊川と中新田堰の間、土手根東沿の堰である。菊川に合するあたりは昭和初期までは大湿地帯(大フケと云われていた)。この堰の東海道に架けてある橋を「亀の子橋」と云ふ。

◎ 中新田堰

中新田より酒匂川沿いに土手根を流れ海に入る。四町五十五間、巾六尺、三尺。

◎ 大道東掘

酒匂堰より大道東を流れ、免耕地にて悪水堀に入る。

◎ 長耕地堰

酒匂堰より川代、長耕地東を流れて、酒匂部落中央部の東海道に出、川端より菊川に入る。二十町二十間、巾七尺、三尺。

◎ 石領堰

長耕地堰より分流、印刷局工場の中央部を流れ、川村分より小八幡に入る。七町三十間、巾九尺。

◎ 蓼原堰

長耕地堰より分流、印刷局宿舎の中央部を流れ、酒匂小学校裏より小八幡悪水堀に入る。六町七間、巾三尺。

◎ 悪水堀

西湘高校グラウンド南東の辺より南下し、酒匂神社の前を流れ、横町と瓦屋敷の間を流れ、連歌橋の辺で菊川にそ、ぐ堀割。中古は「逆木堀」又は「逆木川」と呼ばれていた。印刷局西官舎の北辺は、通称「柳屋敷」と呼ばれており、この屋敷跡だとされている所を取巻くように、悪水路は「コ」の字形に掘割られている。柳屋敷が存在していたか定かではないが、逆木堀と呼ばれていた原因であろう。十町二十六間、巾三尺、九尺。

酒匂の主要水路は、慶長年中大久保忠隣の酒匂堰開鑿にはじまり、約百年の歳月をかけ、細い水路まで完成したのは享保の頃と云ふ。

字長耕地、字八割田附近は通称「春田」、字免耕地附近は通称「ドブツ田」と呼ばれた湿地であった。安政年中(二八五)二宮金次郎の門弟酒井儀左衛門と、この附近の地主で名主の川辺段右衛門が音頭を取り、二毛作の出来るような水田にしようと村人を動員し、数年かけて逆木堀を大改修した。水田の灰水を取る(排水する)所から悪水堀と呼ばれるようになった。

◎悪水堀にかかわる伝説(逆木橋伝説)  
悪水堀の東側に字北中宿、通称三軒家と云ふ所がある。三軒家から酒匂神社(当時は駒形社)裏に通ずる道路の悪水堀を渡る道筋に丸太を並べた土橋が架かっていた(今は石橋)。この橋を「逆木橋」と呼んでいる。天文二十二年(二五三)日本一の龍馬といわれた「池月」と云ふ馬が橋より落ちて死んだ。それ以来この橋を馬が渡ることを禁じられた。その後永禄年中(二五三)北條家の家臣佐々木次郎某と云ふ者が、片腕を切り落とされ、橋より落ちて死んだ。以後この橋から落ちたり橋上で転んだときは、着物の袖や下駄など身に付けているものを置いて来ないと祟りがあると云い伝えられている。

このようなことは千代の四方坂伝説や、各地に伝わる黄泉の国伝説と同じ種類のものである。この逆木橋より東に三十間程離れた三軒家部落の畑の中に塚がある。この逆木橋で死んだ佐々木次郎の墓塚だと云われており、幹囲二間余の榎の大木がある。枝を切ったり折ったりすると祟りがあると云われ、通称「佐々木塚の祟り榎」と呼んでいた。平成七年、地主がお祓いをし榎を切り塚をくずし、大見寺に御魂を永代供養した。

十四 飛地

飛び地は、中里・鴨宮・

国府津と入山(酒匂財産区)がある。

◎ 中里

鴨宮地区の水田は、天正年(二五三)から元和年(二六三)にかけて、酒匂村北部が開発され中里村が成立し、酒匂村北西部元八木下郷が開発され、下新田、中新田が成立した。この新田開発には北條氏の遺臣と近郷の農民が参加した。開発成った新田は開拓者に払い下げられた。次に示す飛地は、この時酒匂の住民が開拓した水田と、後に酒匂の農民が買い取った地である。

中里堀合  
一反二畝二十四歩

全

一町四反三畝三歩

全一部前川堀合

四反四畝二十三歩

前川村堀合

一反二畝十七歩

全

九畝四歩

前川村堀合は前川村の飛地で順礼街道の辺り。

前川堀合田島中里の間

五反九畝六歩

鴨宮屋毛下

一反二畝二十六歩

鴨宮下耕地

一句鑑賞

四畝二十二歩 植村忠左衛門、礪源五連  
 全 一反三畝歩 書の状にて、巳年酒匂分  
 全 一反八畝二十七歩 内から津分割付之事、米  
 享保十六年(一七三二)二月、 三百八十俵三斗一升、但  
 酒匂名主川辺段右衛門が 三斗五升入、此内三俵は  
 中里農民の田を買った。 名主給に可引、名主中と  
 『中里原正家文書』 有る。

◎ 国府津飛地 酒匂村の飛地を国府津  
 『新編相模風土記稿』国 農民が管理していたと云  
 府津村の項。元和中(二二) うことのようにある。  
 ◎ 小田原城代、近藤石見 徳川時代の村の財産  
 守秀用の臣より出せし書 は、水と山の使用を中心  
 二通には、 として村民が強く結ばれ  
 イ 元和四年閏三月四 たから、水利権と入山林  
 日、植村忠左衛門等五人 野が重要であった。村民  
 連書状にて、酒匂分の内 が村の規制に従って溜池  
 から津田作、其方に申付 や水路から水を引き田畑  
 候上は、於以来綺ある間 を潤し、山林原野から飼  
 敷由を載、宛名に、かう 料の草、燃料の雑木、肥  
 津興惣衛門殿とある。 料の草、燃料の雑木、肥  
 口 巳年十月二十三日。

ははの手の記憶を灯す夜店かな

山崎悦子

俳誌、鹿火屋同人の俳歴の長い作者。右の句、夜店をぶらり散歩した時の句であろう。

いくつになっても母の思い出は心に深く刻まれているものである。母の手の、「記憶を灯す」は実に巧い言葉の表現でなかなかたやすく詠えるものではない。幼き日の手の温もりにも触れているような感慨が、夜店の明かりの中にふつふつと甦ってくるのである。

作者ならではの得難い心境であろう。(剣持芳枝)

料、建築材料等を得る重要な財産である。

「酒匂財産区」は、

久野地内 八十三万六  
百七十三平方メートルの山地、  
箱根小湧地内 十六万  
二千五百一平方メートルの山  
地、  
同地区 千五十九平方  
米(ここは恵明学園に貸し  
てある)を有している。

明治二十二年(一八九六)地  
方自治法が施行され、紆  
余曲折の末、小田原市總  
務部管財課の管理とな  
り、その利潤の何割かが  
酒匂町に支給され、体育  
祭、防災、民生活動等に  
有効に活用されている。

財産区管理会は委員七名  
以内、任期四年、財産区  
住民の選挙によって決め  
る。

◎ 明治二十四年(一九一  
九)久野村外十一ヶ村共有地  
の管理運営を協議し規定  
書を作った。

十五 行政

酒匂村の行政を記述す  
るに当り、以下七項に分  
け、古文書 伝説、考察  
を列記する。

1 太古 共同体、

指導者誕生

2 古代 中央政府支配、  
豪族誕生

3 中世① 鎌倉幕府、  
足利幕府支配

4 中世② 大森氏、後  
北條氏支配

5 近世 江戸時代、  
大久保氏、稲葉氏支配

6 近代 明治時代、  
縣政

7 現代 大正、昭和、  
縣政

1 太古

太古 四千年前頃より  
酒匂平野に狩猟を求めて  
人が住み付き、個々では  
危険なので次第に一ヶ所  
に集まってお互いに助け  
合い、共同体の部落を成  
していった。

平成十四年、中里の遺

跡発掘調査で、二千百五  
十年前、酒匂平野に稲作、  
農耕文化が営まれる様  
になったことが明らかに  
なった。その指導者を中  
心に行動するようにな  
り、首長が誕生し、やが  
て地方豪族の支配となっ  
た。

2 古代

1 大化元年(六四五)大化の

改新により、公地公民の  
制度が敷かれ、地方豪族  
の支配は禁じられ、土地  
は召上げられ、代りに  
封土が与えられ、ここに  
酒匂郷が成立した。

2 大宝元年(七〇二)養老律  
令が制定され、国司、郡  
司、里長が置かれ、行政  
区画が整えられた。国司  
は中央から派遣され(任  
期六年後四年)で補佐官司  
として、地方の有力者、  
元豪族が登用された。相  
模国の官司に「酒波人麿」  
が登用されたのがこれ  
である。

3 平安朝期(五〇)頃より  
貴族政治は乱れ、現地の  
支配者が強固となり、や  
がて武装する者も現れ、  
ここに地方豪士が生まれ  
た。

酒匂氏がこれで、地方  
有力豪族に、朝廷が牧場  
を命じた。その人が酒匂  
右馬頭で、朝廷の代理で  
酒匂郷を支配した。

4 平安末期(二三)鳥羽  
上皇が箱根権現に酒輪郷  
(酒匂郷)四十八町を寄  
進した。『箱根山縁起并  
序』

(つづく)



露国・日露の役俘虜のこと(17)

八十七年ぶりのお礼 後編(17)

内田善作記 「日露戦役従軍記録書簡往来」  
吉田雪子編

九露国メジムエーヅ出発から  
神戸帰着まで(二八九号のつづき)  
シンガポール港に入港

故・隠岐威重

糸で織った緋)等に兵児帯を締め、髪は束髪に結びりボン飾りとしり。

一月三十日午前八時頃シンガポール港に入港す。港は実に広大にして船舶で梁(棧橋)に入るもの多く、又港内に停泊するを見たり。午後日本在留人の案内にて、各中隊各々所々を見物した。又障害者も電車にて動物館に至り、種々見物し帰途海岸に至り休息し巻き煙草等を寄贈せられ、又齒科医山本竹次郎氏宅に至りて炭酸水並びに氷等を馳走せらる。帰途も車にて帰船す。

時に午後七時なりき。電車内にて市内を往来する日本婦人を久しぶりに見たる時は実に恋しく思いたり。然れども賤業婦故又思い変え、外国まで恥辱を晒すと思えば亦然のみ恋しとは思はざりき。日本婦人は多く、賤業婦多しと認めたり。風俗大抵中型、並びに紺緋、瓦斯緋(ガス

乗して船に至りて訣別す。野菜、魚類等は非常に安価なりと。

清国人は極めて多数にして二十万人も。余りは黒奴人、英人なりと。二月一日上陸して市中を往来す。午後五時帰船す。

シンガポール港出帆

シンガポール出帆三十九年二月三日、和田岬に上陸同年二月十五日正午

二月三日正午シンガポールを出帆す。在シンガポール日本愛国婦人会より、鶏並びに芭蕉の実、椰子の実等を寄贈せられたり。婦人会員は凡そ百名ばかりなりと言ふ。寄贈品、パイナツプル・蜜柑・牛蒡の缶詰・煙草・半紙・菓子。

二月九日正午より海上波高く恰もビスケー湾の如し。二月十四日午後五時土佐の国の南端なる灯台を見る。二月十五日午前三時半頃神戸港外に入港す。東明するに及び港内に入る。

船舶は碇泊すると見るも、家屋の低き為港の景色甚だ不十分なり。二月十五日正午和田岬に上陸す。それより直ちに陸軍病院第一号室に入り休憩す。

二月十五日夕、和田岬にて瓦煎餅若干、本一冊寄贈。神戸婦人奉公会より葉書四枚、巻き煙

草一個、五厘紙八枚。

内田善作より

(葉書)

内田重兵衛様

前略御免下され度。只今無事上陸仕り候御休心下され度、いづれ連隊に着の上は解散と相成る次第、電報を以て御通知申し上げ可く候につき御出願い度、若し御不都合に候はば狩野の兄にてもよろしく候間、差し遣わしくだされ度願ひあげ候也。

二伸 狩野へも右の由、申し上げ置き候。御ふくみまで。御面倒ながら衣服御持参下され度。

十帰隊(明治三十九年二月十日)

七日)

帰宅(同年六月三日)

神戸駅午後十時三十分発車、大阪駅十一時三十分、京都を二月十六日午前二時半発車、午前六時米原着。此処にて朝食をなす。寄贈品菓子二袋、売薬二。名古屋にて昼食、手当金として十九円給せらる。

内田善作より

(葉書)

内田重兵衛様

拜啓 今朝は遠路御足労様且つ種々御交配の段、謝し奉り候。就いては無異表記連隊に編入相成り候に付き何れ両三日中には解散に相成るべくと存せられ候に付、その上御通知申し上げ可





く候間、皆々様にも宜しく御伝言相成り度、願ひ上げ奉り候。

二月十七日夜

早々

内田善作より

内田重兵衛様

(手紙)

拝啓 その後審問の義、日曜日又英国皇族の着京等に就き将校、兵卒の歓迎にて未だ開始に相成り申さず但々呆然として寢食するのみ。然し昨日審問委員だけは決定候に付、兩三日中には開始に相成るべくと存せられ候。審問と雖も別にむづかしき事は御座なくとの事、とにかく、当夜後備歩兵第一連隊は後の田義屯の激戦において負傷の為俘虜となりし者ばかり且つ当連隊の將校に於いてもその当時の戦況は篤と了解し、我々に同情を

表し、これに加え審問委員の中には田義屯の激戦に負傷の上、敵手に収容せられたるも我が軍の追撃激烈なるを以て、そのまま捨置き、その後我が軍にて収容せられた將校も加わり居らるるに付、必ずむづかしき事御座なく候間、決して御心配無き様

呉々も申し上げ置き候。

二月二十日

早々

内田(はは)より善作殿

一寸申上候。先夜国府津にて

面会致せし大いに安心致し候。

その後入営を致してより身体傷

所等は別段の変わりも御座無く

候や。御伺い申し候。就いては

二十日出の書面にて大いに安心

致し候へ共、凡そ何日頃御帰りに

成り候や、申し越し下され度

候。当方にも皆無事に付、安

心成るべく候、又帰りの日限相

分かり候節は前以て御報知相成

り度、呉々も申し置き候。先ず

は御伺いのみ。 二月二十三日 夜

早々

内田善作より

母上様(内田きく)

拝啓 二十三日出の御書面有

り難く拝見致し候。その後宜しく

消日罷在候御放念下され度。

就いては解隊義、今以て判明せず

候。尤も明日より少しづつ審査

開始に相成り候に付遠からず

終了仕るべく候間、その節は至

急御通知申し上げ可く先は用事

のみ申し置き候。 二月二十八日

頓首

内田善作より

内田重兵衛様御家内御中

拝啓 御書面の趣正に拝承仕

り候。就いては不肖も只今の処、

服より新式の茶褐色の方よろし

かるべくと存せられ候へ共、御

意は如何に候や。御返事待ち入

り候。追つて解散の上は是非と

も御通知申上可く候。 三月二日 朝

早々

内田善作より内田父上様

拝啓 御申し越しに相成り

候、軍服の義、前便に申し置き

候通り出征以来は勿論かかる不

幸の身になりてより皆々様には

一方ならぬ御焦意を掛け何とも

申し訳も御座無き次第、是障害

の身は帰宅後は早々治療致し度

く候へば軍服等は兎に角と思

居り候処、軍服の件御申し越し

に相成り候に付、御意に任せ調

整仕り度、一着様申し上げ置き

候へ共、現役の壮年時代とは変

わり是又將校、下士諸君とは異

なり不肖の如き老年の一兵卒の

華々しき服装は誠に賞味仕ら

ず、なるべく質素なる服装の方

宜しくと存じ候間、御賢察の上、

新式の方へ御賛成願ひ度此段御

願ひ申し入れ候也。直信 審

査は明日を以て一段落終了致し

候間本月末には大抵解隊に相成

るべく、帰宅の節は靴入用に付、

御出京の節私の古靴御邪魔様な

がら御持参下され度御願ひ上げ

候。 三月十日

早々

(つづく)

# 中村原郷 の思い出

## ⑧ 遠藤治郎

### 苗床造り

昭和の初め頃、相模半白胡瓜が下中地方始め西湘地区に盛んに生産されていた。横浜東京青果市場を独占していたことを古老が語ってくれた。

子供の頃家の近くに瓜小屋が建っていて、早朝に採った瓜を共同作業で箱詰めにして上に藤の若葉をのせて蓋を釘で打ち付けている仕事をよく見に行った。各所に瓜小屋が有って、真壁運送が2t位のトラックで集荷して市場に運んでいたようでした。瓜は、苗作りが非常に難しく、そのため正月早々より雑木山の落葉を掻き集めて苗床を造る。薪山で切り出した太さ三寸位長さ四尺五寸位の丸太栗の木が長く使用に耐えるようでした。奥行五尺五寸で間口は反別の瓜畑に比べて、南側を五寸位低く打ち込んで天ばに三寸位の太さの若竹

を四寸釘で止め胴の部分に若竹の二つ割を中と下部に釘で止め藁で編み下げ落葉を踏み積み下肥をまき、上部に麦藁で作った枕を置く。五尺程の障子に荏の油を煮立てて藁の穂を束ねて振り付ける。と障子が透けて見える。種をまいて発芽する迄障子の上に六尺のトタンを乗せ角材を重石の役に置く。自然発酵で三十七度位の温度になる。時々トタン障子を外して散水して、温度の調節をする。

今日ほど品種が改良されてないので、最低三回は移植して節成り瓜苗を作るので工夫があると聞いた。外に茄子苗、トマト苗、甘薯苗等を養父が作って小遣い稼ぎにしていた。

小生の家では小船の早野さんの雑木山を八反歩下草を蒔る権利が有って、薪山が済んで藁を四・五本に決めるために、下草を蒔り、七・八年位過

ぎて落葉を十年位豊富に採れるようになる。余分は乳牛を一頭飼養していて敷藁かわりに入れる。二月・三月頃は牛も草類が少ないので食べる。食べ残しの後方に出た落葉は、堆肥として積み上げ、田畑に播くため、落葉籠に詰めて運んだ。今は砂利採取と工業団地造成で近くの雑木山はなくなつた。

### 人力車

昭和五年(二五〇)一月二日に叔母の家に養子に来て、最初に見たのが変わった車で、空気の抜けたゴム輪で弱々しく見えた。珍しさのあまり、舵棒を上げたり下げたりして遊んだ。

ある日養父に尋ねた。人力車と言って人を乗せて走る。今はハイヤーとって自動車になり、人力車は大正の末頃にはなかったと。

昔は大磯銀行の重役さんや船津県会議員の方を乗せて二宮、国府津駅迄の運賃が五十銭で国府津駅から熱海線の土方の年間賃が五十銭であったと

聞かしてくれた。

ある年船津さんの妹さんが伊勢原の方に嫁に行かれるので五十台揃えなさいと言われて各方面に手配して集車したと自慢そうに話してくれた。

駅待ちと言つて、国府津駅で小田原提燈をぶら下げて客待ちして、客がなくて帰つたと。駅迄客を乗せて五十銭の運賃を戴いて、帰りは坂口屋茶店に寄り酒一本と肴が出て十銭で遊べた。ところが、養母が痼に触つて人力車を引き帰つたこんな面白い話を聞いて七十年が過ぎた。

### 七人佛

昔、西相模一の豪商があった。三十石船を所有して土地の産物を江戸始め手広く商つていた。ある日時化に合い家族七人が亡くなったとか。偶々家が火災の難で七人が亡くなったと古老に聞いて七十年近く過ぎた。世間の移り変わりをみて次から次から災難に出会う家が有り、古老の話では、昔、馬小屋の火事で馬を焼死さすと七代の祟りが

有るとも聞いた。

小生昭和四十一年に住宅の建築で大工が無縁墓地を踏み荒らした。気にもせずいた次の年に長男小学校一年生がその近くで交通事故で死亡。急ぎ石工にお願いして無縁諸精之霊の碑を建て藤巻寺住職をお願いして供養した。昔この地にお堂があつて旅人が泊まつて死者が出、埋葬したと。その右同じ場所です生も交通事故。幸い事なきを得た。馬の死霊も七代も祟る。訳でも人の死霊や生霊がこの世に出て来て事が起きるような気になつて思わずにはいられない。

### 小竹山東際寺の観音様

昭和四十五年(二七〇)八月九日に六十年に一度の御開帳に参詣する巡り合わせた思い出がある。この華表観世音は恵心僧都の御作と伝えられている。国指定重要無形民俗文化財相模人形芝居下中座が、明治初年頃に衰退していた。中興の祖として西川伊左衛門(元水戸藩主)江戸に出て人形浄瑠

璃を修業して結城座等に活躍していたが座の不振でたちゆかなくなり地方巡業や寄席で細々と興行していた。巡業先で妻を亡くして小田原で興業中、小竹の小澤氏の助言により小竹に参り、定住するに及んで小竹人形芝居は活況を呈した。はじめに住居したのがこの観音堂であると伝える。先に恵心僧都本名は源心と申し、平安朝中期、第十六代一条天皇の頃、中国の宍の国に渡り慈恩寺に於て修学。帰国一条天皇の下命により一生一代の精魂を込め彫り刻す。由来について東際寺観音由来記を別紙とし御開帳は三十年目と聞く。

### 消え行く旧家

「御嶽の松」で、中村原の旧家として多田家、加藤家、高井家、田代家、遠藤家の六軒を紹介した。昭和五十年(一九七五)頃より中村原は、急激に住宅地化が進んで、加藤家が約千二百坪の土地を電電公社に売却され、小田原市早川に居を移した。加藤家は長源屋敷を昔二

町歩以上、宅地墓地三十坪を有して分家三軒があった。昭和六十年代に田代家の約千三百坪を売却話では遺産相続とか横浜に中華料理店を何軒か所有経営されている様子。平成に入つて遠藤家が四百坪の宅地を売却し、跡地に八戸の住宅が建設されている。飯田家は妹夫妻に本家を譲つて、市内城山に移住された。残る多田家と高井家である。数百年以上の歴史がある旧家が六軒中四軒も短い二十五年間にとすると、人の世の変転も中村原の戸数が同じ二十五年の間に千戸も増加した。各家の分家は数軒位この地に住み続けている。

### 火の見櫓

昭和五年(一九三〇)に下原の地に来て間もなくの頃に、二本柱の火の見櫓があった。昭和七・八年頃が鉄骨の立派な火の見櫓に変わった。ペンキ塗の人が軽業師のように一番上の屋根を塗るのを見て驚いた。昭和十五年四月一日に東京芝浦電気に入社して寮生活二年程過ぎ

て帰省したら、木材の火の見櫓に建て替えてあって、再び驚く。戦争のため鉄材の供出を令いられて、木の火の見櫓になったと聞いた。

あの鉄骨の火の見櫓には、子供の頃の思い出がある。或る日、小学校から帰って店番をしたり、風呂水を替えたり、八升バケツに二間位の柄の釣瓶で汲み運んで木桶に鉄釜で、養父が割った木の根で燃やして沸かすことを命じられたことがある。ところが、近所の子供が相模半白瓜小屋でビー玉「カチン玉」をしていた。仲間に入り、つい夢中になって釜の火が消えて、湯が沸いてなかった。養父母が野良から帰って叱られ、夕食抜きで戸閉めとなった。仕方がなく蚊が多いので、火の見櫓に蓆を持って波音と星空を見上げて寝たことを思い出した。

### 兵役忌避

日清・日露の戦争の時、戸主は、兵役がなく村の何軒かの潰れ屋敷があつて、その屋敷を買い取り

戸主となって兵役を逃れた話を養父がしてくれた。

昔は屋敷内に墓地があり、墓地は売らずに他所に行った。或る日のこと、父親の遺骨を持って元の屋敷の墓地に埋葬しようとした男がいた。屋敷を買った某氏は、道がないと言つて通させない。困り果てて村役に相談した。村役の人達が同情して、遠藤家の自家の墓地に埋葬の話が進んで、実家の親は非常に酒が好きで、一升か二升か貰つて埋葬させたと、黒御影の小さな墓石がそうだと教えてくれた。その後、自家の墓地と分家三軒の墓地は、宅地開発で移転して禪龍寺の無縁墓地に移された。あの小さな墓石は下積みになったかと思当らない。話では通さなかつた屋敷に住んでいる人に代々病人が出たり、不幸が続いている。そうである。施餓鬼は無縁の霊を祀る行事。この世に生の有る限り供養は大切に思う。

### 質草

昭和十年頃まで魚の鱮

を集めて大釜で煮て土間に広げ乾して電動の臼で搗いて骨粉肥料を製造する工場が中村原字大門の塔台川に近くにあった。敷地が三百坪程で廻りを六尺のトタン板で囲つてあった。乾かす匂いが強く村人は臭い屋と言つた。子供の頃遊びに行き作業を見た。中込と言う姓の人であった。主人がお酒好きで、小生の家から酒をとつていて一升の空の徳利を取りに行かされた。養父は大分酒代が溜まつている話をしていた。当時一升が九十銭程である。中込さんは、長源屋敷に古屋を借りて住んでいたが、事業が自然にうまくいかず、夜逃げ同然に居なくなつた。養父は酒代の代わりに質草がわりに古い仏壇を運んで来た。扇が鼠に喰われた古い古いもの。

その頃、煮汁を塔台川に流したためか下流に海老が大発生してバケツに何杯も捕れた記憶が昨日の事のようにある。その昔は川に鰻や亀や色々の小魚が捕れた。早や六十年前のこと。(つづく)

## 古文書講座 37

湯本(荻窪)堰の工事期間は三年  
―郷土史の落とし穴にご用心―

内田 田 清

## 1 講座終了に当たって

この講座も十年間連載したので今回でまとめをして終了とする。講座では歴史を創造的に學ぼうとされる方々を先ず対象としたので、古文書解説技術だけでなく、その歴史的な背景や評価にも触れてきた。そこでこの機会に、郷土史研究の落とし穴に嵌まらない為の手立てについて荻窪用水の実例で述べさせて戴きたい。

小田原を代表する郷土史家、神奈川文化賞受賞の中野敬次郎先生(二〇三八)の『川口広蔵と荻窪堰』一九五〇年刊(以下『中野本』と略称)を叩き台とさせて戴く。なぜならメダカの学校公園の案内板などで「大工事で約二十年にもおよびました」と、その説が生きている、古典的郷土史書とされているからである。

## 2 萬松院堰地絵図裏書きを読む

風祭萬松院には荻窪堰関連古文書が約四〇点ある。先ず新堰堰地絵図の裏書(写真版)と読下し文の要点は以下のようなろう。

- ① 新堰は久野村・荻窪村あたりの田畑用水不足補助の為である。
- ② 寛政十一年(二五五)十二月には全線の水路工事が出来上がった。

③ 七七八の水路敷の地代として年に永五六七文を永久に給与する。

④ 工事荒地に植えた苗木育成費として十年間永二七七文宛給与する。

⑤ 出水など水路関連での被害は藩で修理・補償する証拠に裏書きする。

⑥ 小田原藩家老渡辺三左衛門以下役人六名より、萬松院へ補説すると、① 湯本堰は久野村

までを開発する計画だったし、現にトンネル跡を確認できる。したがって昭和三年(二五三)の「荻窪灌漑溝復興碑」までは荻窪区有文書でも「湯本堰」が公式名だった。以下では新堰とも書く。

② 工事竣工年は、『新編相模国風土記稿』(以下では、『風土記稿』と略称)が「享和二年(二八三)領主新に疏鑿せし所なり」と記し、『中野本』も同年である。しかしこの年は酒匂

川が山王川に流入する程の水害年なので復旧工事完工を誤記したとも考えられる。なぜなら、萬松院宛て堰地絵図の裏書と場所と数字だけしか異ならない同年・同文の絵図が隣接する宝泉寺にも現存するので寛政十一年竣工は動かせない史実である。

③の地代、④の苗木育成費、⑤の修理・補償について⑥の家老らが連

署していることは、「湯本堰」が小田原藩による開発事業であり、農民による民営事業で無い証拠である。

次に『中野本』がこの史料についてのどのように記しているか確認する。

「堰地代 苗木手入れ費」を与えるからと言ふ証状を送って、ここに萬松院境内新堰通過問題は解決をみた：(宝泉寺にも同様文書を送り)：萬松院や宝泉寺などが、迷惑をしたので便宜や援助を与えてくれた：何事も官営事業でないと大きな効果をあげなかった時代に、この様な民営事業が大成功を納めた事は誇るべきこと：と信ずる(P18)と述べる。

久野村等の範囲、工事竣工と年月を読み落とし、官営を民営とする。寛政十一年になって、境内新堰通過問題が解決した。等々、史料をまとも読んでいないことを示している。

## 3 境内新堰通過問題と史料解釈

『中野本』が言うところの新堰着工の天明二年(二六三)から一七年後に解決という可笑しなことになる萬松院境内新堰通過問題から見よう。

萬松院には「代官所集勸化願書並湯本より水之尾までの新堰控」という経過を記載した厚い冊子がある。中からポイントである第二・第三文書の読み下し文を中心に検討する。

第二文書 萬松院の着工猶予回答書 恐乍ら書付けを以て申上げ候事

一① 昨日仰せ渡され候新堰の儀、口上の趣畏まり奉り候得共、帰寺

仕り諸方見廻り、御見定め杭より見通し候処、拙寺境内甚だ難波にも相成り候様に相窺い候。② 忝くも拙寺儀は、ご先祖様御思召しにて、山林境内御寄付遊ばされ候、御除地の儀に候得ば、拙僧一己の了簡にて御請仕候も何分恐れ多く承り奉り候。殊に拙寺儀は、檀方六軒御除地のみ、寺相統仕り候得ば末代に及び如何様な難波にも相成り候哉。③ 右の趣本寺え相伺い口、御請け仕り度候間、右斯くの如御座候。 以上

(寛政九) 巳二月廿九日 萬松院 寺社御奉行所

『中野本』は冊子の最初にあるこの史料について、①「工事着手の天明二年より十五年を経たる寛政九年二月二十八日に小田原藩から萬松院宛に新水路が境内を通過することを言ひ渡している事が解る：(寺では翌日書状を出した)：②何回となく水路が変更になって、その都度工事の為に土地が荒れ、寺所有の土地が縮小して行くことになるので、是れでは寺の経済に支障を来す：から、③今度の新水路の通過する土地のことについては、本寺の意見を聞いた上でないと承諾が出来ないと言ふこと」(P16)と記す。

①部分から、この日境内に下測量の杭が打たれていたことは判る。『中野本』は「②何回となく水路が変更になって、その都度工事の為に土地が荒れ、寺所有の土地が縮小」した、

とうがった解説をする。しかし新堰の工事は、十五年間何処を工事していたというのだろうか。現在の用水路は、ほぼ標高一〇〇呎を流れている、がたとえ水路が上下したとしても萬松院・宝泉寺・紹太寺の連続する広大な境内山林を通過しないで新堰を開くことは出来なかつたという現場認識が欠けている。

第三文書 本寺よりの通過了承書状  
一筆啓上候：種々ご勘考遊ばされ御代官所集めにて年々寺納成し下され候儀萬松院へ仰せ付けられ、此の度仰せ渡され候新堰に付き萬松院境内に差し障り候間、末代に及び御寄付の境内亡所にも相成り申すべき哉、住持一己の了簡にて容易に御請け難く仕る趣申渡し候得共、：今般にも厚き思召しを以て、寺相統年々御心添え等御座候程の儀に候得ば、右新堰出来の儀違背仕るべき様御座無く候。併し：恐惶謹言

(寛政九) 巳四月廿七日 龍拈寺  
大久保安芸守 (忠貞)

寺社御役人衆中

『中野本』はこの史料について、

①寛政十一年四月十七日、本寺の龍拈寺の名を以て、②萬松院造営に就いて非常に好都合の処置を御勘考下されて有難く存じます。新堰が境内を通過する点に就いては異存は御座いません。どうか寺の山林田畑が減少する事のない様に何とか御計らひ

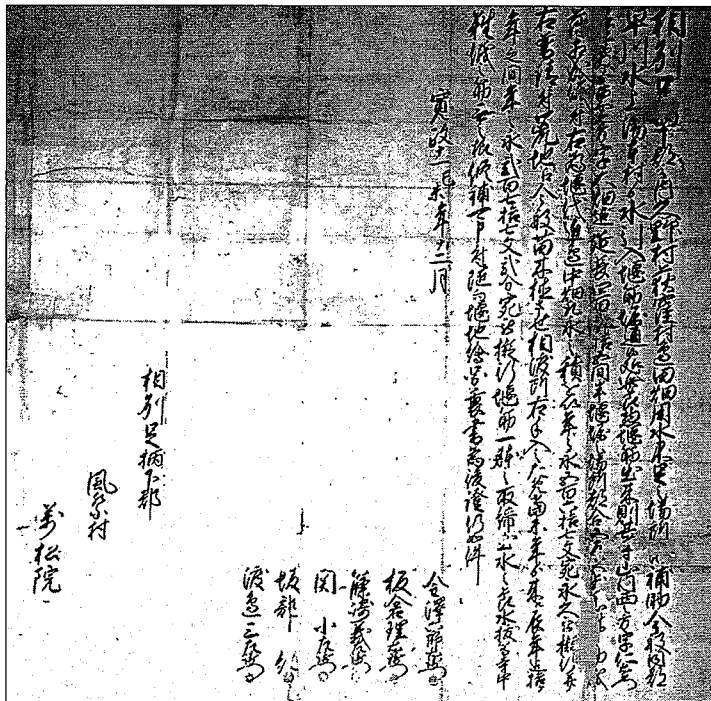
願ひますと申し出して来た。と書く。この手紙回答で、用水路の境内通過、即ち工事開始が可能になつたのであるのに、何故年月日を誤つたのであろうか。現場の藩役人は本寺の了承に二カ月も待たずに催促しているのに、二年余と誤読しているのは、新堰境内通過問題への緊張感の無さ、歴史解明の要件である年月日への無関心を物語っている。

4 「二十年説」は耆老の言

『中野本』が前掲三点の一級史料を、新堰境内通過問題解決過程の史料と誤認したのは、工事期間は二十年(以下では「二十年説」と略記)という前提で史料解釈をしているためだと推測される。では「二十年説」のルーツは何処か。『中野本』は記録の断片さえ残っていないと書く川口家で、八十歳に近い「広蔵四代の孫栄太郎」(二八六六年生れ)が「祖父(安次郎・行方不明者)から聞かされた：単なる聞き覚え」だと記している(P5)。

最初の研究者片岡永左衛門は一九三〇年の「湯本堰と広蔵講」で「完成は：絵図の裏書きの日付より推すと、寛政十一年間違つても同く十二年頃と思はれ

る。然らば起工は、拙者面会した川口家老婦人(84歳の談により工事二十年と信用すれば、安永九年か天明元年と思われるが、是れは想像で他確証が発見すれば兎も角く、今は止むを得ず是れに従う」と「二十年」に留保を付けている。何れにしても川口家の「二十年説」は、百数十年後に老人が「単なる聞き覚え」を語つたものである。もつとも一九二八年建立の「荻窪灌漑溝復興碑」(川添寛隆撰並書)に「溪谷の巖石を穿(う)がつ(二十年を



萬松院境内新堰堰地絵図裏書 萬松院蔵

相州足柄下郡の内、久野村・荻窪村辺の田畑用水不足の補助のため、今般同郡「早川水上湯本村より水を導入し、堰筋掘り通し候ところ、この節総堰筋(水路)が出来た。則其山内西の方字仁右衛門」屋敷より東の方字大畑まで延長四百式拾五間半(七七四メートル)、堰掘の場所都合(合計)、五反五歩の山林助成、薄相成候につき、右の堰代(地代)として、近辺の中畑の取永(税金)の積をもつて年々永五百六拾七文宛永久に擬行れる。並びに「右、普請(工事)につき荒地へ、今般苗木植させ相渡した所は、右手入のため当末年より来る辰年まで拾ヶ年の間、年々二百七拾七文式宛擬行れる。堰筋一鉢(帯)の取締り出水の節の水抜など、寺中難儀の筋これ無き様、修補申すべきに付き、隨而堰地絵図に裏書し後証と為す。仍件の如し。寛政十一年巳未年十二月(二七九九)

- 相州足柄下郡 風祭村 萬松院
- 金澤六郎右衛門 印
- 板倉 理右衛門 印
- 篠崎 義左衛門 印
- 関 小左衛門 印
- 坂部 紉 印
- 渡辺 三左衛門 印

関(けみす)、而して実に享和二年竣功」とあるのが、管見では最も古い。この碑文の「二十年」の根拠は不明であるが、関東大地震の復興事業完成に際し、水路復旧委員会から書家で陸軍中佐の川添に資料を添えて依頼したものであろう。

この碑には広蔵の名は無く、「天明二年藩主大久保侯開鑿の所」とある。ところが「中野本」は、1章「足柄平原の四大恩人」として下田隼人・湯山弥五右衛門・二宮尊徳・川口広蔵を挙げ、「広蔵が、縁故もなき他郷のために、二十年の艱苦と闘ひつゝ、七十余町歩の新田を開き、貧窮の村を忽ち豊饒の村に変ぜしめた大事業」(P4)を一介の農夫「一個の無名の社会奉仕家と、彼の誠意に動かされたる、目覚めたる村民との打って一丸となった結果の賜物であつて、徳川時代の真の民営の偉業として、長く後世に伝承すべき価値あるものと信じて疑わない」(P5)のである。

5 「二十年説」を否定する根拠

湯本・萩窪堰の研究史は七十余年になる。私も一九七四年に「瀬戸堰と萩窪堰と久野堰」発表以来関心を持ってきた。しかし「二十年説」を裏付ける史料は発見されていない。しかしこの説を否定する、史料あるいは情況証拠はかなり知られていた。以下六点について略述したい。第一に萬松院文書では約三年であ

る。代官所集勸化願書並湯本より水之尾までの新堰控」に納められている藩の役人との交渉経過の一部を見ると、第二文書で境内通過に反対し、四月十二日に相馬小十郎が代官所による寄付金集めでの本堂・庫裏新築助成という譲歩と水路が八九分どうり決定と通告。五月四日に大超和尚は、第三文書と萬松院の請書を寺社奉行所へ持参。その後着工。寛政十一年十二月絵図裏書交付であるから、萬松院境内での工事期間は、二年八月、杭打から敷えても三年未満である。他地区でも寛政九年より二三年前からの着工は考えられないから「二十年説」は否定される。

この点、「小田原市史」資料編近世Ⅲでも「絵図裏書」の解説で「従来の伝承である工期二〇年説はくつがえり、工事も藩宮に近い形で行われたことが推測された」(P265)と記している。

また、萩窪堰を最初に活字で紹介した小林覚太郎の「三国伝説」は一九二三年に「広蔵念仏と弥太右衛門」の節で「工期は前の年の冬始めて、二年後の春漸く終わり」(P108)と書いている。この話には誤りも多いが、先輩史家が全く無視しているのは納得できないことである。

第二は小田原藩政情から否定される。東海道沿いの風祭村くるみ坂に36軒×9軒もの陣屋(工事監督宅)を張って二十年間もたらたら工事をしていたら藩主の無能を広告するこ

とになる。幕臣の名門大久保家では、殿を若隠居させ、英名のある忠貞二兵衛(六三三)に寛政八年十五歳で家督を継がせたが、その前年に殿の名代として領内の巡検をするなど、若い殿の幕閣での出世を画策していた。そして忠貞は襲封四年目に湯本堰を達成し、五年目に奏者番として将軍家斎の側近に出世している。

第三は瀬戸堰(川村用水) 関連で天明二年(一七六三)の着工は考えられない。この年の春、瀬戸堰は通水し田植えが出来た。しかし川口広蔵の地元川村岸に瀬戸堰の分水が出来るのは寛政五年頃だから、広蔵の村はまだ水不足で、萩窪以上の貧乏村だったと考えられる。また此の年七月に小田原大地震があり、天守閣が傾き櫓石垣が崩れる、瀬戸堰の大掛樋が破損するなど大被害を受け、藩は復旧費借用などで大変な年だった。

第四は、瀬戸堰の功労者湯山弥太右衛門(「中野本」では弥五右衛門と誤る)の表彰にかかわる。彼は瀬戸堰達成の後十五年の寛政九年になって「御米五表ツ、生涯之内下される」ことになった(墓誌・文書)。これは忠貞による前々年の瀬戸堰検分、瀬戸堰の画期的な成果を湯本堰開発に発展させ、関係者を鼓舞しようという施策の一端と観られるのである。したがってこれは、新堰着工寛政九年説の傍証ともなる。

第五に広蔵は寛政七年(一七九三)三月に岡野村源左衛門に金十両を貸して

いる(開成町内藤家文書)。「中野本」では「萩窪堰開鑿のため多くの私財を投じた」とあり(P10)、小学校教材では、資金に苦心したと教える。したがってこの時期に広蔵に貸金をするゆとりがあるのは、湯本堰着工以前だと考えられる。

第六は全国的に見ても工期二十年は長すぎる。表1のように江戸時代の用水開発は重点短期施工方式が普通である。地元農民が参加するので長期化すると問題発生に悩まされることになるからである。

以上のような次第で、湯本(萩窪)

表1 諸用水の開発期間等 (『萩窪用水の歴史と見どころ』小田原市教育委員会1990年より)

用水名	竣工年代	水路延長	工事期間	設計管理	出願施工
辰巳用水の幹線	1632	12.0km	10か月	金沢藩	板屋兵四郎
玉川上水	1653	42.7km	7か月	幕府	玉川兄弟
箱根用水の隧道	1670	1.3km	4年	小田原藩	友野与右衛門
見沼代用水幹線	1728	85.5km	5か月	幕府	伊沢弥惣兵衛
川村用水分水迄	1782	9.8km	2年6か月	小田原藩	湯山弥太右衛門
萩窪用水の幹線	1799	6.2km	約3年	小田原藩	川口廣蔵?
	※1802	7.9km	20年	川口廣蔵	川口廣蔵

堰の「工期二十年説」は昭和三年以前の記録を発見出来ないし、完工の享和二年説も大洪水復旧工事の誤認の可能性が高い。となると、近代史学における史料批判に基づいた湯本(萩蓬)堰の「工期は約三年」。寛政十一年は幹線水路竣工であり、新堰境内通過問題の解決年ではない。

6 郷土史の落とし穴

先ず湯本(萩蓬)堰関連史料で広蔵の名が出てくる文書の初見を確認しよう。萩窪区有の「明治二十一年二六公子二月一日川口廣蔵念仏周施人連名」帳が最も古い。これ以前に広蔵の名がある史料は、残念ながら傍証資料ではない。

次に『中野本』で広蔵の表彰記事を見てみよう。破格を以て名主格に取り立てられ、苗字帯刀をも許され、毎年褒賞米三俵を給せられ」とある(P10)。しかし『二宮尊徳全集』14—P46に次の記事がある。

一 御扶持式人分御殿場村 名主格 忠助

一 現米壹俵 川村山北

一 現米五俵 川村岸 名主 弥五郎 広蔵

天保初期の小田原藩の扶持人記載資料の抜粋だが、広蔵が米五俵を支給されている。弥五郎は瀬戸堰の弥太右衛門の孫で、五俵だった祖父の褒賞米のうち壹俵を引続き支給されている。したがって広蔵が瀬戸堰の指導者と同等の功績を挙げたとする

と湯本堰の指導者であったとしか考えられない。しかし彼には肩書きも苗字も無いので俵数も含めて、伝承が誤っていることを証明している。先ずは史料を重視し探すべきことだ。

ところが郷土史家の多くは、何故伝承の「工期二十年説」などを金科玉条とし、一等史料などを曲解や無視するのだろうか。伝承を否定し、真正直な歴史を書き、語ったために、以後取材や史料調査を拒否された例をいくつか知っている。伝承に乗り、適当に郷土自慢を書き、耳障りな事を語らなければ歓迎される。といった計算が働かからではなからうか。

『中野本』はかなりよく聞き取り調査がされている。しかし情報化社会の現在とは歴史的条件が違うとはいえず。史実・史料への配慮に欠陥がある。第一は史実の誇大化と矮小化である。「如何なる干天の時も混々たる水有りて、秋は黄金の花の波、忽ち近郷屈指の富村と化した」(P25)。と願望を史実らしく美化する。実測三三〇坪の桜田トンネルを七〇〇坪とも記す。反面、一九町歩余の水田がある萩窪村と、一二町歩余しか水田のない川村山北を比較せずに、また検地帳も探さずに「水田が殆どなく、米がでない」極めて貧乏な村という伝承を信じてしまっているのである。

第二は、想像(創作)と史実の曖昧化である。「明らかになっている点、五右衛門の瀬戸堰の影響を受けてい

る事は事実で、先にも述べた様に、彼が瀬戸堰の工事に参加した経験に依って、萩窪堰開鑿の発願を起し、確信をもつに至ったものであった」と記す(P9)。しかし二代目弥五右衛門は広蔵の誕生以前の二七三七年に没しているし、広蔵が天明二年(一八三三)の瀬戸堰工事に参加した証拠は何もないのであるから、伝承継承か、自己の想像であるのに、如何にも史実らしく断言するのである。

第三は、捏造と偶像化である。『中野本』は人足数・資金額・農民名などを全く挙げず、萬松院「絵図裏書」を無視し、瀬戸堰の幹線水路が官費、支線が民費であることも確認せずに「藩で形式上の監督はしても、あくまで民間の事業としての立前であったので、あまり出費もしてくれず、大方は村方持であったから、関係部落の負担も仲々大変であったに違ひない」と押しつける(P20)。

上記のような歴史研究方法は、広蔵を偶像化して顕彰するという結果をもたらす。「百姓、酒屋、大工、箕売り、無類の働き者で、身体が丈夫で意志が固く、義侠心の強い男、それに足柄平原を駆けめぐった男だから、どこに行っても顔が広く、地理に詳しく時勢に明るい。足柄農夫の一大名物男であった様だ」と史料も挙げずに書く(P9)。「様だ」と語尾を不確かな断定にすれば捏造の責任を免れるのであろうか。

第四は年表・数字・用語への鈍感

さである。工期二十年の中で、着工以前の問題である境内通過問題が竣工三年前に解決するか、萬松院と本寺との交渉結果を二年間も待つ等の不自然な解釈は年表作成で避けられる。青年藩主忠真の最初の業績である湯本堰開鑿を実体の無い「民営事業」として憚らないのは歴史意識の鈍さを物語っている。

私は郷土史の著書・論文を読み、書きする時、上記の四点は大事な視点、留意点になると思う。何故ならそれらが、伝承の重視という基盤に乗っている場合が多いからである。伝承は研究仮設に転化する側面を持つ、しかし伝承を素直に受け入れる態度では研究にならない。疑問なくして研究なしである。伝承を素直に受け入れる事は、郷土史の落とし穴に陥ることであり、前記のような誤りを次々に犯すことにつながる。

無条件な伝承の受け入れ、郷土史の落とし穴に陥らない、最良の方法は現場に立って歴史的な観察をすることだと、経験的に信じている。例えば、萬松院の境内山林を歩けば、此処を通過せずに湯本堰が出来ないこと、最初の開渠跡が農道になっていることなど沢山の史実を発見できる。

現場・現物観察は伝承や捏造の歴史を正す時、史書・史料を批判する時の最良の方法であり武器である。なお拙著『萩窪用水の歴史と見どころ』小田原市教育委員会一九九〇

年刊を参照いただくと有難い。



# 片岡日記 25

## 片岡永左衛門

大正十四年三月

十七日 晴

銀行整理具休案之為メ登  
應知事及井坂氏二面會。  
二案ノ内一案ヲ決定。来  
ル廿日ニ再度登廳トシテ  
散會帰途、寺田ニ立寄。  
不斗親一風邪ニ氣付電話  
ニテ聞合セシニ龍夫就職  
ニ付談話あり。直ニ上京。  
商科専門部卒業後本科ニ  
入学ノ希望ナリシニ、岡  
田小三太医師ノ不賛成等  
ニテ入学ハ思ヒ止リシ  
モ、就職口ニ就ハ本年希  
望者ハ昨年未より奔走ニ  
既ニ決定スル者多ク、今  
ハ時期ヲ失シタレハ、希  
望スル會社銀行ハ到底有  
ヘキ筈ナク来年トナレ  
ハ、古クナリ新卒業生ヨ  
リ取ノ傾キ有ハ可成。此  
際ト俄ニ小倉嘉明野崎廣  
太等ニ奔走ヲ依頼スルキ  
事トシ、其方法ヲ相談十  
一時就床。

十八日 晴  
東京出立。藤沢本店ニ立

寄五時帰宅。直ニ尾崎亮  
司同道、野崎廣太氏往訪、  
龍夫就職口ヲ依頼せし  
ニ、心ヨリ承知セラレシ  
モ、本年ハ時期ヲ失シタ  
レハ、成否ハ不斗目下不  
成ナレハ、十二月迄ニハ  
何トカ成ルヘシ。何ニセ  
ヨ日本人ト再訪ヲ約シ帰宅。

十九日 晴

本店ニテ株主委員会ニ出  
席ニテ六時発ニテ上京。  
龍夫野崎氏ニ来ル廿三日  
面會スル事トシ、親一方  
ニ止宿。

廿日 晴

八時帰途ニ就キシカ、本  
日ハ常務重役具休案ニテ  
神奈川県ニ登廳ノ筈ナレ  
ハ猶一泊ト、親一方ニ引  
返セシニ、龍夫就職口ヲ  
三井物産ナレハ周遊ス可  
キ由、海軍少將小倉嘉明  
より申来タレハ、兎も角  
依頼スル事トス。

廿一日 晴

東京出立藤沢本店ニ立  
寄。具休案ニ付株主委員

招集等之協議し七時帰  
宅。銀行も漸々整理方針  
確定セシ己ナラス、龍夫  
就職口モ十中八九ハ見込  
も付き心よく就寝。

廿二日 晴

午前尾崎ニ至り明日龍夫  
帶同野崎氏ニ面會ヲ依  
頼。岡田小三太医師ノ病  
氣見舞帰途松隈ニ立寄、  
雑談午後近來帰住セル小  
学時代ノ旧師大原氏往訪  
懐旧の談話種々尽サルモ  
辞ス。途中龍夫加奈子帰  
省ニ出逢一同ト帰宅。龍  
夫ハ小倉嘉明ニ行く。夕  
刻ヨリ相中雜誌執筆。今  
夜ハ大賑ヒ。

廿三日 晴

株主委員会ニテ藤沢本店  
ニ行九時帰宅。

廿四日 晴

龍夫午前野崎氏ニ至り午  
后帰京。

廿五日 晴

支店長會議にて藤沢本店  
ニ至り八時帰宅。

廿六日 晴

本店ニ至り午后帰宅。昨  
日ヨリ熱海迄鉄道開通乗

客多し。

廿七日 晴

龍夫より来状。親一病勢  
未タ全快セス発汗之薬リ  
申来ル。明日早朝持參す  
る事とし夜中薬草取集  
ム。親一病氣龍夫ノ就職  
ハ急ノ必用ナキモ、他ノ  
友人ニ対し如付と心中ヲ  
推察ナトスレハ、夢も覺  
て起床ノ時ヲ待つ。

廿八日 晴

午前六時発ニテ上京。親  
一過日来さしたる事なき  
も熱の往來有り。龍夫今  
日小倉氏之照介ニ依り三  
井物産ノ人事課長ニ面會  
ニ行しニ、本年ハ欠員無  
シト就職ヲ謝絶サル。学  
校ヲ卒業ナスモ、就職ハ  
又一層苦勞ニテ、入学よ  
りも又困難之模様。夜ニ  
入り茶吞ながら此分ニテ  
ハ病氣も一兩日にて全快  
するも、時勢後ノ此煎薬  
を服用さる可し。少しに  
ても若キ者ノ病氣ハ何よ  
り心配。龍夫の事ハ親一  
有ハ拙者の心配無用の筈  
なるも、左様ニ不成就職  
不如意ノ為龍夫の落胆セ  
ざるかなと、車中も孫の  
思心中往來セリなど談話

一同苦笑す。

廿九日 午後より雨

九時発ニテ帰宅。彼是に  
て車中も不面白。  
晴れやらぬ心の曇のそれ  
のみか  
空もくもりて風の身にし  
む

三十日 晴

午前八時発ニテ横濱ニ至  
り、各重役ト落合縣廳興  
信銀行ニ至ル。明日又々  
出張之為メ五時諸氏ト別  
レ高田ニ止宿ス。

三十一日 晴

興信銀行ニテ各重役ト落  
合シモ、井坂氏ニ明後日  
面會ノ都合トナリシモ明  
日所用之為メ諸氏ト八時  
半別レ高田ニ止宿。

春もや、なかはとなり  
ぬ

もえ出し草葉を恵む日  
の光りにも

大正十四年四月

一日

興信銀行ニ立寄四時半帰  
宅。

二日 晴



重役會にて本店二至五時  
帰宅。

三日 晴殊二暖氣

震災二焼失シタル郡役所  
も工費三萬六千九百九十六  
円ヲ要シ、木骨鉄鋼コン  
クリート二階建本館百廿  
九坪食堂倉庫等完成。本  
日落成式。午後加奈子帰  
京送り上京親一風邪も先  
全快。

四日 十時頃より雨

昨日引替殊に寒し。  
東京出立銀行整理ノ件ニ  
テ横濱ニ立寄夕食シ、十  
時半帰宅。

五日 晴

在宿相中雜誌執筆。

六日 晴

在宿当町現在戸数五千八  
十五戸。明屋百五拾。震  
災前五千五百八拾戸。但  
し坪数ハ震災前ノ凡半数  
未滿。

七日 晴

八日 半雨

本店二行五時帰。  
銀行頭取廣瀬氏病死ニ付  
火葬場二送り九時帰宅。

九日 曇

篠窪老母悔ニ立寄。山形  
氏告別式ニ上京、三時品  
川発ニテ藤沢ニ立寄六時  
帰宅。

淳子の床の花瓶二桜の折  
枝をさせしを見て

す辺ものになせし桜の  
花をおほみし

足をのほして  
ねるがらに見る

淳子の瓶に桜をさし座  
右ニ置きくれたれハ

朝より夕までも花に見  
入てハ恍惚として花も

恋々はかりなり

花精など云事ハ古人の  
作意想深とのみ思ひし

に花の□□に心の志ら  
すに溶けゆきてこそ花

の精をも感得せらる辺  
し。

ながめやる夜半のさく  
らのいる溶けて

人の心のう辺にさくら  
む

何となく是にてまたす  
わらす再考か。

十日 晴

十時発にて本店二行。後  
任頭取の相談アリ。五時  
半帰宅。今日ハ大久保神  
社惣代として大久保子爵

家より招宴有しも、帰宅  
時間不定の為メ断りて行  
す。定めし、子爵も本日  
の祭典ニ社参せられしな  
る辺し。堀端の桜も咲初  
めたるも、震災にて邸前  
の数本ハ枯死し前年より  
減したるも、昨年ハ震災  
の余波にて電燈もなかり  
しに、本年ハ一昨夜より  
電燈ハかがやきしも、寒  
氣之為メ未夕人出少し。

十一日 晴

大磯千疊敷ニ登臨したる  
に、流石ニ眺望よし。行  
道路も別荘の桜所々咲  
始。茶亭ニ入り弁當を済  
し、永禄年間武田勢之引  
揚し道路筋ハ彼しこか、  
北条之追撃之勢ハ此方か  
など思ながら、遙に三増  
の古戦場も見渡し山を下  
り四時帰宅す。

十二日 雨

頭取廣瀬藤右衛門君之会  
葬し四時帰。雨中所々の  
桜よし。

打たれし春のとはりか  
佐保姫の

霞につ、く花の白雲  
出来方旧派なるもおか  
し。

十三日 晴

銀行二出動。

十四日 晴

桜馬場柑園二行き、岡田  
氏も来合せ、道路拡張之  
実査。

十五日 雨

今夜相中雜誌完結し、重  
荷を下し之心地。

十六日 晴

在宿相中雜誌之執筆昨日  
にて終り少し無聊。

十七日 晴

藤沢本店二行  
暖冬ハ富士の山頂黒く  
人々頂上の雪消しハ地変  
とやと不安なりしニ今朝  
車中より見れハ峰も麓も  
真白いて新に粧しか如し、  
富士の山幾世のこれる  
白雪に

今朝新しき色の匂辺る  
峰も麓も雪ニ粧ひて富  
士の山

足柄山のそらにそひゆ  
る。

十八日 晴

銀行二立寄道路擴築ノ準  
備ニ桜馬場二行。帰途萩  
窪寿昌寺ニ立寄、古鐘ヲ

見。古色蒼然トシテ龍頭  
など最も雅趣。藤沢山清  
浄光寺之彫刻七字有も鐘  
よりも文学新しく思ニ寺  
伝ニテハ開山上人ノ靈夢  
ニ感じ寺前ノ田地より掘  
出せしと。実否何れなる  
を知らず。午后本日執行  
之町會議員選挙立會人之  
通知書到来。

小庶宛第二二二号

大正十四年四月十八  
日

小田原町長今井廣  
之助

片岡永左衛門殿

町會議員選挙立會人選  
任ノ件

来ル本月二十五日執行ス  
ヘキ當町會議員選挙立會  
人ニ選任致候間同日午前  
五時三十分マテニ當町役  
場ニ御參會相成度

追而別紙承諾書ニ記名御  
調印ノ上至急御提出相煩  
度申許り也。

足柄山のそらにそひゆ  
る。

銀行二立寄道路擴築ノ準  
備ニ桜馬場二行。帰途萩  
窪寿昌寺ニ立寄、古鐘ヲ

銀行二立寄道路擴築ノ準  
備ニ桜馬場二行。帰途萩  
窪寿昌寺ニ立寄、古鐘ヲ

銀行二立寄道路擴築ノ準  
備ニ桜馬場二行。帰途萩  
窪寿昌寺ニ立寄、古鐘ヲ

銀行二立寄道路擴築ノ準  
備ニ桜馬場二行。帰途萩  
窪寿昌寺ニ立寄、古鐘ヲ

銀行二立寄道路擴築ノ準  
備ニ桜馬場二行。帰途萩  
窪寿昌寺ニ立寄、古鐘ヲ

銀行二立寄道路擴築ノ準  
備ニ桜馬場二行。帰途萩  
窪寿昌寺ニ立寄、古鐘ヲ

銀行二立寄道路擴築ノ準  
備ニ桜馬場二行。帰途萩  
窪寿昌寺ニ立寄、古鐘ヲ

銀行二立寄道路擴築ノ準  
備ニ桜馬場二行。帰途萩  
窪寿昌寺ニ立寄、古鐘ヲ



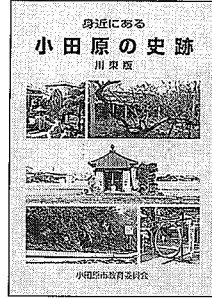


身近にある

◇小田原の史跡 川東版

発行 小田原市教育委員会  
価格 五〇〇円

A5判二〇九ページ



この本は、文化財保護課が平成元年度から市内全域を対象に行った旧跡調査事業の一環として発行されたものである。

発行にあたっては、市民の皆さんに出来るだけ多く読んでもらうことを目処に、平易で読みやすく、しかも水準を落とさないようにと、一応中学生以上を対象に考えられている。

史跡の意味を考えてみると、歴史上の出来事にゆかりのあった跡を指す。つまり、建築物あった跡や残っている物を指し、遺跡とも呼ぶ。かつ

ては史跡の範囲は狭く、学術上、等級を付ける程であった。この条件を当てはめると、その例は極めて少なくなる。そこには庶民の生活の息吹が感じられない。

史跡の範囲を、道端にある石造物や言い伝えの残る場所や物などまでに広げるようになってから、まだ日が浅い。それは文化財保護という考えが一般に浸透するようになってからである。

「川東版」とは酒匂川より東側の地区に残る史跡を紹介したものである。

地区は橘、国府津、曽我、千代、鴨宮、酒匂の六箇所に分けてある。六地区は中学校がそれぞれ置かれていて、地区が一体となつて成り立っている。

この本がA5判サイズのハンディなのは、史跡を尋ねるとき、ガイドブックとして持ちやすいようにとの配慮がある。

また、訪れる史跡がすぐさま分かるように地区ごとに地図がつけられる工夫が凝らされている。さらには、史跡の項には最寄りの駅やバス停から目

やすとなる徒歩時間を載せる配慮がなされている。巻末には、資料として「小田原市指定文化財一覧表」と「小田原(川東地区)のあゆみ略年表」が付けられ、至れり尽せりの内容となっている。

◇一丁田物語

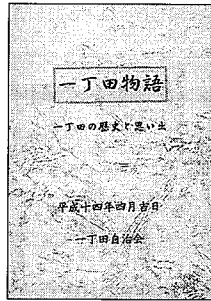
一丁田の歴史と思い出

A5判 五ページ

非売品

発行 平成十四年四月

一丁田自治会



一丁田自治会では、昭和五十五年ごろ一丁田の歴史をまとめようとする動きがあったが、そのときの原稿は発表されずに保管されてきた。今回「一丁田物語」が発行される

におよび、その原稿と新しく寄稿されたものを加えられた。さらに、末尾

に、一丁田に住んだ奥津福太郎氏の『関東大震災竜巻体験記』を加えており、さらには、「小田原大空襲」の体験を持つ一丁田の人々十二名が、座談会を平成十年八月に開いたのを載せ、一丁田の受難の歴史に完璧を期している。また、相原俊夫氏は「空襲の体験と敗戦」を記す。さらに、奥津達雄氏は「敗戦時に生きた一人として」の手記を残している。

一丁田自治会は住居表示により本町二丁目と浜町一丁目とに町名が人為的に分けられているが、以前から一体となった組織であった。冒頭、「一丁田の歴史と町名の由来」を載せている。続いて宝安寺の縁起は地元ならではの記録。相原俊夫の「一丁田の辻村家」は類書に

較べ詳しいのは流石。今井芳子の「かのや今井本店の歴史」は参考となる点が多い。「古き良き一丁田の思い出」は5人が分筆。巻末に参考資料5点をあげる。戦争中の町内会に対し金属回収の小田原市長からの表彰状も面

白い。

総じてみると、自治会だからこそ発行できたもので官製ではとても不可能である。そこには一丁田の歴史を次世代に伝えようとする地元の方々並びに編集者の熱気の本誌を通じて伝わっている。云うなれば、熱意と誠意の結晶と言えよう。

◇三嶋暦・相模国の弘暦網

一 小田原に暦会所があった!

著作・発行・制作

石井 啓文

A5判三ページ

非売品



三嶋暦の研究を始めるようになったのは、知人から著者の生まれた山王原村(現小田原市東町)に暦会所があったという古文書を贈られてからで、その古文書には、「その外三嶋暦は伊豆、相模両国

に限定販売されていたが、伊勢御師が土産に伊勢曆を配るため三嶋曆の販売が圧迫されるので、嚴重に取り締まって欲しい」と云う内容であった。探求心旺盛な著者は、『秦野市史資料所在目録』から、三嶋曆版元の河合家の手代今井家の当代(秦野市横野)が、三嶋曆に関する古文書二十一点を所持されているのを知り、早速研究に着手し、次のような成果を発表している。

三嶋曆の起源はハツキリしないが、中央の官曆に対して地方曆が、見られるようになったのは十五、六世紀頃で、関東地方で最も古いのが伊豆の三嶋曆であると云う。現在、最古の三嶋曆は、永享九年(一四三〇)のもので足利学校が所蔵しているが、著者は表紙に利用している。

三嶋曆版元の河合家はその昔、伊豆に三嶋明神を勧請するに当たつた縁者であった。なお、小田原北条氏が三嶋曆を保護したのは、北条氏政の時であるという。

それにしても、その研究論文を一つの自家製の冊子に纏めるのは素晴らしい。今後も突つこんだ研究を期待し、その成果を大成されることを祈る。

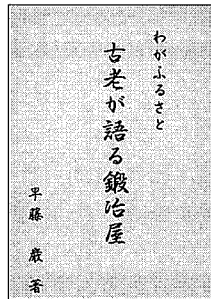
◇わがふるさと

古老が語る鍛冶屋

著者 早藤 巖

A5判二三ページ

非売品



鍛冶屋は昔ながらの古風を最近まで維持してきた集落であった。また、石橋山の旗揚げに失敗した源頼朝が逃げまわった所だけに、いろいろな伝承が残っている。

この鍛冶屋は、北の幕山に抱かれ日溜まりで、冬温かく、頼朝伝説のある自鑑水から発する流れは、幕山のすそを洗うように流れる新崎川となり、夏涼しいところにある。戦時中、縁故を尋ね

て吉浜に疎開した人が、鍛冶屋はまさしく桃源郷だといったほどの環境に恵まれた場所だ。

ところが、近年、交通の発達・道路網の整備と共に、生活環境の良さから転入する人が多く、村は都市化した。

著者の父松太郎は、鍛冶屋の山奥の県有林の管理を依頼された関係から、著者が年少の頃よく県有林のある処に連れていかれた。松太郎は、記憶力よく昔のことをよく覚えていて、鍛冶遺跡の場所や頼朝が逃げ回った所を著者に教えた。ほかの年寄りからも郷土の昔の出来事を知った。

著者が村の語り部を意識する年輩になってから鍛冶屋村の歴史を記録に残すことを決意した。

これを知った湯河原教育委員会は、全面的な援助を惜しまなかった。

本書の伝承の記述は、古書とは食い違いがあるのは面白いし、また、それが意義のあるところと思われる。

なお、ミカン專業農家の著者は、昭和四〇年頃



から柑橘の無農薬栽培の研究に没頭。五六年には『柑橘無農薬栽培法』を発表したが、ある県の園芸試験場の技手は、基礎が無いのにと批判を加えたが、念のため追試験をしたところ、著者の云う通り成果が挙げられ技手は謝ったという話がある。

◎小田原市立病院で患者の名を「〇〇さま」と呼ぶ。初めのうちは、こそばゆく感じたが慣れると何とも感じなくなった。近頃、開業の薬局でも「さま」と呼ぶところもある。「さま」は上流階層専用ではないよい例である。

◎小泉内閣の支持率が大幅に下落した今日この頃「米百俵」を持ち出すのは、証文の出し遅れの感

じながら記す次第。小泉総理の「米百俵」は昨年度の流行語大賞に選ばれているが、それ以前の昭和三十年代後半にこの言葉を用いたのは長洲前

神奈川県知事である。長洲知事は、当時、中学生の増加に対する県立高校

百校計画を、県下PTAの役員たちに、長岡藩に例に熱っぽく話しかけた。出典は、山本有三の戯曲「米百俵」にあることは知られていても、会場は、一瞬静寂に包まれたことを覚えている。流行語大賞に選ばれなかったのは、神奈川県と全国との違いがあったからであろう。現在、高校の統廃合が進められていることを考えれば、時代の先を見透すことがいかに困難であることが物語る。

訃報

池上 優氏

(いけがみ・まさる) 大井町金子七九五―二

去る二月二十三日

死去されました。

享年六十四歳

田中 儀平氏

(たなか・ぎへい) 小田原市萩窪四三九

去る四月二日死去されました。

享年八十二歳

謹んでお悔やみ申しあげます。

享年八十二歳

謹んでお悔やみ申しあげます。

享年八十二歳

謹んでお悔やみ申しあげます。

享年八十二歳

謹んでお悔やみ申しあげます。

## 講演 「小田原の郷土史再発見」

- 一、小田原北条氏の伝えたもの  
 二、「明治小田原太平記」を読んで

市民教授 石井啓文氏

## 一、小田原北条氏の伝えたもの

小田原北条氏は、敗者となったこともあり、その事績を記す史料は余り見られない。状況史料から、北条氏が伝えた事績として次の五点が考えられます。

1 「小田原の町」は、二代北条氏綱により天文元年(一五三三)頃、計画的に創られ寛永地震後に稲葉氏が整備、江戸時代を通して維持され、現代の小田原市街へと伝えられてきました。

2 「小田原城総構」は、豊臣秀吉の侵攻に備えて、天正十七年(一五八九)頃、五代氏直が築造し、小田原合戦の翌年に、秀吉は京都を「御土居」で囲み、大坂城にも総構を築きます。また、駿府城を始め各大名が挙って「総構」を応用しています。

3 「篠(山王)曲輪」も、籠城戦と言われた同合戦で、六月二十二日に激戦を展開しています。大坂冬の陣で真田幸村が造った真田丸は、同曲輪に倣ったものと思われれます。

以上の三点は、文献から状況史料を発掘し、推定できます。

4 「早川上水」は、天文十四年(一五四五)には確認でき、日本最古の水道です。その十数年前の天文元年(一五三三)頃、二代北条氏綱によって、町作りと同時に着工されたのでしょうか。

小田原合戦後、寛永期までに各地に敷設された水道・用水の領主を調べてみました。

名称 領主 完成年代

① 小石川上水 徳川家康 天正十八年(一五五〇)

② 甲府用水 浅野長政 文禄三年(一五九四)

③ 富山水道 前田利長 慶長十年(一六〇五)

④ 近江八幡水道 京極高次 慶長十二年(一六〇七)

⑤ 福井芝原用水 結城秀康 慶長十二年(一六〇七)

⑥ 駿府用水 徳川家康 慶長十四年(一六〇九)

⑦ 米沢御入水 上杉景勝 慶長十九年(一六四四)

⑧ 赤穂水道 池田政綱 元和二年(一六二六)

⑨ 鳥取水道 池田光政 元和三年(一六二七)

⑩ 中津水道 元和六年(一六三〇)

⑪ 仙台四谷堰用水 元和六年(一六三〇)

⑫ 福山水道 元和八年(一六三三)

⑬ 佐賀水道 元和九年(一六三三)

⑭ 神田上水 寛永時代

⑮ 桑名御用水 寛永三年(一六二六)

⑯ 金沢辰巳用水 寛永九年(一六三三)

領主の◎印は、小田原合戦に参陣し間違いなく「早川上水」を見て帰った武将です。家康は、江戸の水道調査を命じ、三ヶ月後に①小石川の地に水道を敷設しています。寛永期に完成した

⑭神田上水の基です。更に將軍職を秀忠に譲り、駿府を隠居城とすることが決まると、代官に命じて⑥駿府用水も完成しています。家康には、小田原「早川上水」が、町作り上、強烈に印象づけられたのでしょうか。

◎印は、北条方支城を攻めた別動隊で、小田原に来たかどうかは判明しません。△印は、断定できないが、主従関係等から小田原参陣と思われる。⑫福山水道は、道の中央の水路や、浄水池(蓮池)を設ける等、「早川上水」に酷似している。

⑧赤穂水道の池田政綱は、合戦時は生まれていないが、姫路城主池田輝政(小田原参陣)の五男で、実母は輝政の継室となつた五代北条氏直夫人の徳姫(家康の娘)です。赤穂は家康からの化粧料と言われます。⑨鳥取水道の子です。両者ともに町作りの際「早川上水」を参考にしたことは容易に推察できます。

5 「三嶋曆」は、地方曆では日本最初ではないかとも言われる程、伝統があります。

『北条五代記』は、大宮曆と大小の月に相違が生じ、三嶋曆が正しいという北条氏政の裁定で大宮曆を廃され、三嶋曆を保護したことを記しています。

秦野市横野の今井家文書で、寛政四年(一七九三)、山王原村(現東町)に曆会所があったことが知れます。三嶋曆はこれまでの郷土史には全く記されていません。追って、「相模国での販売網」と題して詳述いたします。

二、「明治小田原太平記」を読んで

私が史談会に入ったのは、著者高田掬泉先生の紹介です。同書を読むと、先生と片岡永左衛門が重なって感じられます。私は、この一年「早川上水」

を、市が「用水」と呼ぶことに異議を唱えてきました。前号で、神奈川新聞の記事から、「北条氏の事績が抹殺され、小田原の歴史が曲げられる」と訴えました。当市自ら「水道」を「用水」にする明確な回答は未だにありません。

上手く言えませんが、旧態已然とした小田原の様子を嘆かれる永左衛門と高田先生に、私自身も当市の現代では考えられない古い体質が、ダブって感じられてならないのです。歴史的にも教育の面でも、「用水」とすべきではないと訴え続けます。

私事で恐縮ですが、高田先生をお尋ねしたのは、私の縁戚に足柄看護婦会(長田テフ・下図)があり、八雲潟(千度小路の運野健蔵)という四股名の力士が引退して小田原で相撲興行をしていました。作家川崎長太郎も両者の縁戚で、二人の助力を得ています。私とは再従兄弟(はとこ)に当たります。

また、私の母の長姉が小田原藩士柴山徳左衛門家(の長男)に嫁いでおり、そのご当主が「箱根戊辰戦争」で小田原藩の失態を描かれた先生に感動し、お食事を一緒に願ったことがあります。先生は、看護婦会の長田テフをご存知でしたし、長太郎が「だるま」で食事をしている

のを見て、不審に思ったとも言われていました。

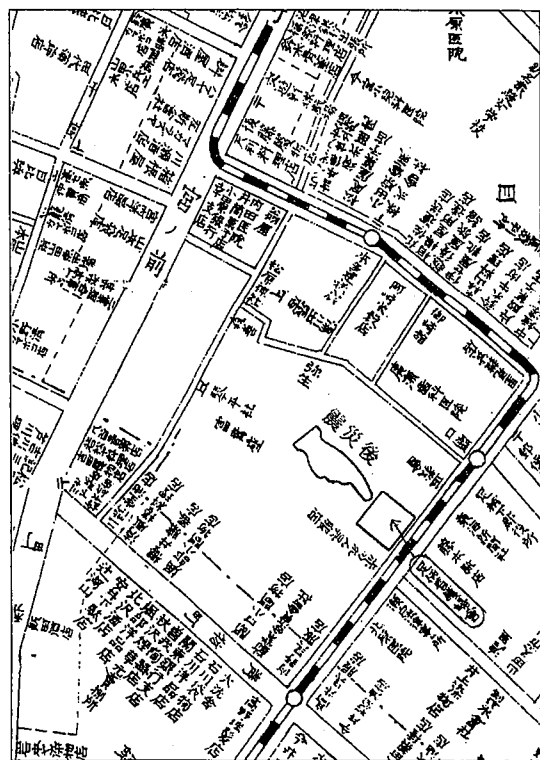
亡くなられた未婚の母テフの長女豊子様(平成六年、九〇才)に、話を聞いています。

「看護婦会は、長太郎の祖母長田ヤマ(病弱で長太郎の母ユキを出産後離縁、四〇才で他界)が、妹のテフに資格を取らせて明治三十年頃に幸町に創設し、平塚から熱海までを仕切っており、閑院宮邸にも出入りしていたと聞いています。震災後は反対側の元東映劇場の所に移り、六三坪のそれは大きな家でした。おテフさんはお酒は呑むし、相場は張るし、私たちのようなケチな人間ではありません。私は六ツまで目黒の安藤家に預けられ、おヤマさんが亡くなってから母親の元に戻されました。小学校の頃は小言ばかり言われ、大変キツイ人で目黒に帰ろうかと何度も思いました。おテフさんは東京へは馬車で行きましたが、神奈川に着くと兄の銀次郎が迎えに来ており、汽車で新橋まで行つたと聞いています。交友録などは東京の音楽学校の校長先生などそれは大変なものでした。ただ、三度の災害(明治末の大火・大震災・空襲)に見舞われ運がなかったと思います。戦災後、ここ(鴨宮)に来てからは、小田原に帰ろうとは思わ

ず「生まれてこの方、こんなボロ屋に住んだことはない」などと言いながらも、ここで七年を過ごし、一男一女をもうけながら、籍を入れることもなく、最後までお相手のことは何も言わずに八三才で亡くなりました」

話を聞かせてくれた豊子様もそうですが、明治の女性の強さというのでしよう、看護婦会という当時では新しい社会的事業を成功させ、平塚らいてふ

等、新婦人運動を起こした人々と共通したものを感ぜさせます。長田看護婦会(とも言った)と八雲潟について、ご存知のことがありましたら、お知らせいただければ幸いです。(文責・石綿 勉)



足柄看護婦会  
産湯長田蝶  
相川小田原町幸町寺  
本宿原電報機一ツサ

小田原案内図(大正2年)〈部分〉(小西正人氏所蔵)

長田テフの名刺

平成13年度事業報告

- 1、4月21日(土)総会 小田原市立図書館  
講演 「二宮尊徳の生涯」  
講師 斎藤清一郎氏
- 2、会員研修事業  
5月17日(木)矢作方面 講師 星崎茂氏  
6月8日(金)松田・大井・秦野方面  
9月18日(火)八王子城跡方面  
11月8日(木)～9日(金)  
足助・岩村・明智方面  
1月19日(土)靖国神社方面
- 3、会報「小田原史談」編集  
発行186号～189号発行
- 4、総集編第3巻、第4巻の  
販売
- 5、その他  
会員名簿発行  
役員会6回開催  
曾我傘焼き祭、北条  
氏政・氏照公墓前祭  
久野古墳慰霊祭  
役員参加

○日時 平成14年4月27日13時30分  
○場所 小田原市立図書館  
○総会次第 略  
○講演会 講師 石井啓文氏  
★「小田原北条氏の伝えたもの」  
★「明治小田原太平記を読んで」

14年度  
総会報告  
小田原史談会

平成13年度編集委員会特別会計報告

区分	収入額	支出額
前年度より繰越	19,419-	
本会計より振替	800,000-	
賛助会費	680,000-	
預金利子	11-	
会報印刷費		1,368,150-
会報発送費		67,380-
編集費		29,962-
事務費		8,628-
次年度繰越金		25,310-
合計	1,499,430-	1,499,430-

【賛助会費説明】  
 3口  
 カネボウKK  
 ヤオマサ株式会社  
 2法人¥60,000  
 2口  
 ①田代商店  
 小田原ガス  
 籠清  
 さがみ信用金庫  
 5法人¥100,000  
 1口  
 52法人¥520,000

平成13年度一般会計決算報告

収入の部

項目	本年度予算額	本年度決算額	増減	摘要
前年度繰越	85,935-	85,935-	0-	
預り金	0-	132,000-	132,000-	前納会費*
会費	1,260,000-	1,280,400-	20,400-	427名*
預金利子他	400-	12-	▼388-	利息
合計	1,346,335-	1,498,347-	152,012-	

4. 3. 31

支出の部

項目	本年度予算額	本年度決算額	増減	摘要
総会費	50,000-	48,654-	▼1,346-	
会議費	90,000-	82,700-	▼7,300-	
連絡費	15,000-	13,220-	▼1,780-	
交際費	30,000-	44,200-	14,200-	
慶弔費	50,000-	0-	▼50,000-	
事務用消耗品	8,000-	8,218-	218-	
振込手数料	7,000-	4,240-	▼2,760-	
名宛ラベル	50,000-	0-	▼50,000-	
研修委員会費	100,000-	100,000-	0-	
編集委員会費	800,000-	800,000-	0-	
会員名簿印刷	60,000-	52,500-	▼7,500-	
積立金	50,000-	50,000-	0-	10.1月積立
予備費	36,335-	19,950-	▼16,385-	入会用チラシ印刷
合計	1,346,335-	1,223,682-	▼122,653-	

【支出説明】

会報印刷 No186 36ページ No187 38ページ No188 32ページ No189 22ページ  
 会報発送 会員、地域の各学校、文化機関などへ郵送、封筒

平成13年度総集編積立金特別会計報告

区分	収入額	支出額	摘要
前年度繰越金	694,103-		
本会計より繰入	50,000-		
総集編 No3	12,000-		¥2,000×6
総集編 No4	70,000-		¥2,500×28
普通預金利子	45-		
定期預金利子	172-		
総集編No4印刷代		434,000-	前期未払分
郵送料		1,140-	
繰越金		391,180-	
合計	826,320-	826,320-	

註 総集編 No3 期首在庫 146部、有償 6部、期末在庫 140部  
 総集編 No4 期首在庫 330部、有償 28部、無償 6部、期末在庫 296部  
 神奈川信連小田原支店 普通預金 ¥291,180-  
 定額郵便貯金 ¥100,000-

平成13年度史跡めぐり会計報告

月日	方面	収入額(円)	支出額(円)
	前年度繰越金	455,826	
	利息	176	
5/17	鴨宮・矢作方面	1,000	35,233
	事業費	100,000	
6/8	松田・秦野方面	126,000	150,865
9/18	八王子方面	226,500	211,050
11/8-9	足助・明智方面	539,280	547,062
1/19	靖国神社方面	245,000	230,785
	利息	54	
	合計	1693,836	1174,995

残額518,841円は来年度に繰越します。

\*前納会費内訳

平成14年度分	青木洋一(早川)、朝倉(国府津)、金原(二宮)、栗原(武蔵野市)、 福井(湯河原)、西村(酒匂)、佐野(久野)、赤塚、内藤、後藤(新屋)、 天野(箱根)、片岡(生駒)、長沢(国府津)、山室(穴部)、小川(飯泉)、 石黒(栄町)、鈴木孝(鴨宮地区)9名分 河合(大井町)、 山口(新屋・小台地)17名分、小林(曾比)
平成14年度 15年度分	山口県 磯部
平成14年度分 ～16年度分	兵庫県 沼田

一般会計決算を上記の通り報告いたします。残額¥274,665円を平成14年度会計に繰り越します。平成14年3月31日 小田原史談会 会計委員 鳥居泰一郎  
 会計監査報告

平成14年4月4日

監事 佐久間俊治、鶴井道泰

第3回史跡めぐりご案内

有名な“<sup>きんさくめいてっけん</sup>金錯銘鉄剣”が出土した“さきたま風土記の丘”方面へ行きませんか!

日時 9月21日(土) 小田原駅前(東口) 7時 雨天決行
日程 駅前(7:00)ーさきたま風土記の丘(11:00)ー忍城跡(12:30)ー中山道(鴻巣宿・桶川宿地)ー駅前(19:00)
会費 5,000円(含昼食代)
受付 9月10日(火) 14時より
伊豆箱根トラベル小田原営業所(改札口横)(小田原駅工事のため、場所・時刻が以前と変わりますので、おまちがえないようにしてください。)

平成14年度役員

会長 山口 一夫
副会長 曾我 保夫、吉池 清、剣持 芳枝、高橋 佐年
編集委員長 石綿 勉
研修委員長 勝俣淳一郎
会計委員 鳥居泰一郎 武田 敏治
渉外委員 小野 意雄
会員委員 石井 啓文
総務委員 植田 博之 勝俣淳一郎
監事 佐久間俊治 鶴井 道泰

平成14年度事業計画

- 1 会員研修事業
5月15日(水)久野方面 9時 五百羅漢
6月11日(火)平塚・茅ヶ崎・藤沢方面
9月21日(土)さきたま風土記の丘方面
11月7日(木)~8日(金)中山道・木曾路めぐり
2月8日(土)高麗神社方面
2 会報「小田原史談」編者発行事業
190号~193号
3 総集編第3巻、第4巻の販売
4 その他
会員名簿発行
役員会 必要に応じて随時開催

第1回史跡めぐり実施報告

“久野方面を歩く”

日時 5月15日(水)(9時~16時)
日程 五百羅漢駅(9:00)ー玉宝寺ー山神社ー1号、2号、4号、15号古墳ー総世寺(昼食)ー欠の上観音堂ー東泉院ー幻庵屋敷跡ー京福寺ー潮音寺ーあしがら駅ー五百羅漢駅解散(16:00)
講師 高橋佐年副会長
参加者 42名(氏名略)

第2回史跡めぐり実施報告

“平塚~藤沢方面へ”

日時 6月11日(火)
日程 小田原駅前(8:35)ー平塚八幡宮ー旧相模川橋脚ー鶴嶺八幡宮ー浄見寺ー大庭城跡(昼食)ー遊行寺ー小田原駅前解散(16:20)
会費 4,000円(含昼食代)
参加者 50名(氏名略)

平成14年度一般会計予算

14. 4. 27

収入の部

Table with 5 columns: 項目, 本年度予算額, 前年度予算額, 増減, 摘要. Rows include 前年度繰越, 預り金, 会費, 賛助会費, 預金利子他, 合計.

支出の部

Table with 5 columns: 項目, 本年度予算額, 前年度予算額, 増減, 摘要. Rows include 総会費, 会議費, 連絡費, 会報発送費, 交際費, 慶弔費, 事務用消耗品, 振込手数料, 名宛ラベル, 研修委員会費, 会報印刷費, 会員名簿印刷, 積立金, 予備費, 合計.

\* 機関紙『小田原史談』4回発行 各号を40頁とする

\* 前納会費内訳

Table with 4 columns: 平成15年度分, 山口県 磯部, 平成15年度分 ~16年度分, 兵庫県 沼田

特別賛助会員

智恵袋 相田酒造店

小田原銀座 アオキ画廊

熱海 アオキクリニック

飛多魚屋

紳士服の アメリカヤ

(株) アルファ

伝統工芸 石川漆器(株)

税理士 石原和夫事務所

伊勢治書店

画材 ガクブチ ゆうえ

自動車修理 板金塗装

⑤ かまぼこ

⑥ 小田原ガス

小田原市農業協同組合

小田原報徳自動車

株式会社 オートセンター・スキャマ

オ リ オ ン 座

かまぼこ籠 清

JA 神奈川信用

カネボウ株式会社小田原工場

神尾食品工業(株)

木地挽 日下部産業(株)

かみやま小児科クリニック

興電社

小伊勢屋

国府津館

(有)小松石材店

さがみ信用金庫

趣味のこふく さくらい

箱根湯本温泉 正 榮 堂

雀のお宿 春光荘

小田原 冬 秀の かまぼこ

辰寿堂スポーツ

大 営 不 動 産

高木整形外科医院

手打うどん 小田原城趾前 田毎

網元直営 交 渉 海

④ そびそ二宮

茶半家具株式会社

ちん里う本店

角田ガクブチ店

東京電力(株)小田原営業所

ト一ホ一建物 齧

鳥かつ樓

和菓子 菜の花

八小堂書店

八子マサ

平井書店

(有) 古 屋 花 店

株式会社 報 徳

建築金物(株)星崎仲吉商店

家庭金物 本 多 時 計 店

※ 町 松 坂 屋

学生専科 ⑨ マルク

諸星運輸グループ

曾我の梅千 美の政

塩辛・かまぼこ みみづく幼稚園

ヤオマサ株式会社

小田原史談(年四回発行)

創刊昭和三十六年一月  
年會費 普通會員三千元  
〇〇一三〇一三二八四三三六